

# 海外農業ニュース

No.

29

昭和47年4月20日発行  
毎月20日発行

もくじ

## 中国特集

中国の海外協力 ..... 1

前日本青年海外協力隊事務局長

篠浦公夫

中国の農業 ..... 39

中国総合研究所長

城野宏

付

農業ニュース一四〇二八号索引 ..... 75

財団法人 海外農業開発財団

## 中国の海外協力（講演）

講師 篠 浦 公 夫

時 昭和四七年三月二日  
所 経 団 連 会 館

（開 会）

岩田理事長あいさつ

お忙しいところお集まり頂きありがとうございました。ご案内のとおり中国を主体にした技術協力の問題について篠浦さんにお話して頂きます。

昨今の中国をふまえて、我々の海外技術協力、経済協力のあり方は非常な変化が来るであろうことは確かであります。

したがって、アジア閣僚会議のあり方、アスバックに対する考え方、シンガポールを中心の五カ国会議の問題への考え方というものは、中国の出方をみながら考え、あるいは考えをおす面が多にあることと思うのです。

どうしても平和の基礎にあつては、技術だけを協力するとか、あるいは資本だけで協力するとか、あるいは政治を優先させなければならぬとか、こういう形では今後の世界状況の中にははまらないものだと思います。

広州貿易会議でマレーシアが中国に深く喰い入ることになりました。その根底にはご存知の通り現在マレーシアには九〇万トンのゴムのストックがある。日本円に換算すれば一〇〇〇億円ですが、そのうちの二〇万トンを政府ベースで買って貿易進展に寄与する。これは自由諸国と共産諸国のちがいはありますけれど、ものの考え方



としては、政治、技術、経済、貿易が一本の線にはまらなければ今後はずかしい状態ではないかと思ひます。

### 教訓的事例

以前ビルマとタイとの境界に六〇%のオイル・シールの鉱山があり、これを開発すれば他の国から輸入するよりも品質も良く、コストも安いものができるということで一億数千万円をつかったことがあります。

ところがいよいよという時にタイ国軍部、陸軍内部とカルテックスその他の貿易大財閥がからみ合っていることがわかったのです。こういう問題を深く研究せずに技術協力をしたという大きな誤り。パキスタンに尿素工場、インドネシアのスラバラにソーダ工場を技術協力でもってつくった。しかし。附帯産業、技術が一致しないのでスクラップになつてしまふ。あるいはポゴールに養蚕製糸工場をつくつたけれど、農村が蚕を飼う、桑を植えるということを研究せずに技術協力したため殆んど草ぼうぼうになつてしまつてゐる。これは賠償という問題があつたからとはいへ、今後のものの考え方、大きな試金石だと思ひます。

### 中国の出入

英国のトインビーは朝日新聞の記者と会見のときに、今後の日本のあり方について非常な示唆を言つておりました。

「今まで中国は文明におくれていてじつと考えていた。そして思索していた。今度、自由圏内に入つて一諸にのりだしてくれば、今までの先進国のやつた誤り、あるいは公害と称するものを全部のりこえて新しい形で出て来るだろう。したがつて我々及びアメリカその他が色々思索したことのあやまりを全部修正して、最良の方法で

突貫するであろう。これは大いに留意すべきである」と、トインビーは批判しておりました。

私どもは今後、ニクソンが訪中したから多少変わらぬと思う以上に、我々の今までの技術、経済協力、あるいは政治、技術、資本がばらばらであつてはだめだということを強く考えさせられるのです。

### 中国の施策とは

その根源は、中国はいかなる施策を講じてくるであろうかという問題ですが、本日の講師にお願いした篠浦さんは一〇年以上かかつて青年協力隊を仕上げた方であります。さらに実は篠浦さんは北京大学を卒業され、後ずつと中国におられたのです。外務省にその後入られて以来、今日までの篠浦さんの功績は遂次拝聴させて頂いておるわけですが、篠浦さんは協力隊を各国に送り、足跡を多くみてその善悪を判断されている。たとえば、タンザン鉄道などは実際に自分で見て中国の施策をも研究されて来ております。

後から講師からお話があると思いますが、タンザン鉄道、一八九五キロのあの大事業を中国がやっています。ニクソンと会見する以前、それも四年前からいかに苦心し、タンザニアの青年を自国に入れ、派遣される人間にスワヒリ語の特訓をし、六〇人以上の医者、鉄道を建設する沿線に送り、医療施設もととのった。この大事業はニクソン以前のことですから、こういう中国がいよいよ我々と共にアジア政策、世界政策に乗り出すということになってきたわけで、大いに考えなければならぬことであります。ここにお集まりの方も、評論家や学者の説、あるいは本などで深く研究され、経験のある方も多いかと思ひます。

しかし、北京大学を出られ、中国問題については戦前から深い経験



のある篠浦さんに、青年協力隊の実績と合わせてお話して頂くことは、日本にいかん評論家がまた学者が多いといえども、本日のお話し以上に実のあることはないと思うのです。

どうぞ御清聴下さい。

### 篠浦講師の講演

#### 米中会談後の状況

中国の海外協力という本題に入る前に、ニクソン大統領が北京に行きまして、これによって今後、どのように変わってくるかということも、非常に大切なことだと思いますので、この点につきまして、私なりの考え方をお話し申し上げます。これからの問題として重要な問題は米ソの問題、米中の問題、それに対する日本の問題があげられる。日中の国交回復問題については、国会の場合、少なくとも政府自体が直接ハンドルする問題でありますし、また、我々国民が注視をしている中では、変な動き方は出来ないと思います。

一番こわい問題は開発途上国のその土俵の中で、日本と中国、あるいはソ連、そういう関係がどういう形で相撲とられるか、これは今後非常に大きな影響をもつてくると思います。

そこで、まず、ニクソンと周恩来の会談後、どのような形がでてくるかということについて、私なりの考え方を若干申してみたいと思います。まず第一、私は現在の中国自体、毛沢東が実権者だとは思っていません。現在の中国はもはや、周恩来の実力によって、周恩来の方針によって動いていると見ています。このことは今後の中国を分析する上の基本姿勢として大切です。毛沢東主席の方針であるとすれば、さほど国際的に大きな変動、自由主義陣営とのつなが

りははじまらないと思うのです。しかしながら、周恩来総理が実際にハンドルするとすれば、柔軟なというか外交に非常にたけた、また国際政治家としても第一級品である実力をもった人物ですから、今後打ち出す政策というものには、対日問題はもとより世界的に影響を与えるものが出てくる可能性が強いと思わなければいけないのではないか。その点におきまして、私は昨年八月林彪が失脚したのちの中国の対外政策についてみた場合、中国自体の動き方が過去の動き方とはちがって来ているとの見方をしています。今度のニクソン、周恩来会談におきましては、双方ともに、やはり、いべきこと、とるべきもの、あるいは目的というもののに対する双方のぶどまりは、相半ばしていると評価していますが、実質的には中国が実を得たとみえています。大体、七〇%と三〇%のちがいで、中国側に有利な会談ではなかったかと思えます。というのは、表にでている問題というよりも、今後、中国が開発途上国、あるいは自由陣営に及ぼす影響を考えますと、二〇%ぐらいは中国側に有利なP・Rではなかったかという見方をしています。ただ、この問題については、やはり五月のニクソンの訪ソ、ならびに秋の国連の場をみまさんと、実際には表面にでてまいりません。しかし、当然現段階においても、アジア地域に与えた影響は甚大なものがあります。私はこの問題において感じることは、アジア太平洋地区において主導権を樹立するとうか、主導権をもつような国に対しては反対するんだという取り決めがあります。私はこの一項を非常に重要視しております。少なくともその対象となるものが日本であり、ソ連であるということのはつきりしています。したがって、単に言葉で書けば一行ですが、この一行が今後日本が東南アジアに発展していく上で、非常に大き



な問題になってくる重大事であり、米、中のアジア政策の基本的共同宣言と受取っております。この点我国としては十分心にとめて政策の立案に当る必要があります。

そこで、今後アジアの問題を論ずる場合留意しなければならない問題は、ソ連との関係だろうということです。ソ連の場合は、インド、パングラ・デッシュを中心にしてくと同時に、北ベトナムにも大きな柱がうたれ指導権が打出されてくると思います。しかし、カンボジャ、ラオスの問題について言いますと、現在の時点に於いては、ソ連は手がおよんでいません。中国側の勢力下にあることは明らかです。したがって、北ベトナムの問題が今後、ソ連と中国との間に難かしい問題をもしたすのではないかとみています。それに今度は、アメリカ軍の撤去ならびに今後の和平工作という問題に必らずソ連が一枚加わってくるでしょう。その問題の解決が五月のニクソン大統領の訪ソの際にでてるのではないかとみています。

したがって、五月がすぎるまでは、ベトナムの現状はおそらく悪化をしても明るい見透しはありません。その関係で、問題自体をふまえてみますと、ベトナム問題の解決にソ連を無視しては考えられない強力なものになりました。そこでソ連の力関係をみると、軍事力、又は軍事関係経済力に重点をおいて、アジア大陸に集中しており、今後ますます強化される傾向にあると認められる。

次ぎに力を二分するならば、東南アジアはこれから中国の勢力範囲として、中国が伸びてくる場とみななければなりません。その場合若干問題がでてくる可能性は、インドネシアをソ連と中国がどのよう

に扱うかということです。その他の諸国については、大方、中国の影響力下にはいる土壌が

あるとみなければなりませんまい。

### 中国の海外協力への政治的判断

私が非常に重要な問題として考えているのは、中国が実際に行なっている海外協力という問題です。先ほど岩田理事長もふれられたタンザン鉄道の例をとってみても、中国の海外協力というものの姿がはつきりしてきます。

第一に、政治目的がついているということです。これは高次元にたった政治判断を行ない、計画がたてられ、青写真が出来上ると、それに向って国内のあらゆる力を結集し、同時に、対象国の力もその中に入れてゆく共同責任体制をとっており、日本とは全く逆になっている。日本は、経済問題が優先して海外協力が行なわれております。したがって、中国のやっている海外協力は一糸乱れない一本の線が貫ぬかれています。これは共産国の特色でもあります。

### 中国は日本の海外協力をどうみているか

そこで非常に難しい問題として考えられることは、日本の海外協力には輸出振興と資源確保があらゆる面に優先しているということです。あとで申し上げますが、これが日本の海外協力で非常に足を引っぱっていることは事実です。とくに、この問題に便乗して中国は、今、盛んに日本の経済侵略をPRし、さらに日本は大国意識をもつて非常に威張っていると、くりかえし報道しているのです。これには二つの狙いがあるのですが、後ほど申し上げるつもりです。これが非常に悪い形となつてでてきているのです。もちろん、我国としては不用意にそういう政策が発表されているということもあるでしょうが、たとえ善意であつても相手の立場を十分理解した上で取扱うだけの配慮が必要であることを認識せねばならない。現に開



発途上国ではそういう額面にとられていることは事実なのです。

次ぎに感じられることは、先ほどふれたように中国の海外協力は、少なくとも政府が一つの方針をうちたてそれにあらゆるものを結集して実施する方式です。これには非常にしつかりした線が打ち出されており、途中でフラフラすることは一切ありません。全く海外協力問題については、最優先で決定されております。

### 日本の海外協力と諸外国のそれ

ところが、我国の状態をみると、最近日本は、GNPの一%に近い○・九三%をやっていると盛んにPRしています。それでは、それに価いするものをやっているかというところ、少なくとも政府ベースについてみると残念ながら○・二三%にすぎません。これでは全くお話しになりません。とくにそれ以外についても、たとえば無償協力についてみても○・六八%になっているにすぎません。このように、政府ベースとして○・二三%ぐらいやっている現状で、日本が海外協力をを行っているんだと考えること自体、経済大国を自称している国としては全くおかしいことと言はざるを得ません。

諸外国は政府ベースが全く優先しているといえますか、政府ベースそのものにウェイトをおいて海外協力をやっております。したがって、おもわくというものがあまりでて来ないんです。少なくとも政策の線に沿っていけるといって有利さがあります。我国の場合は、民間の企業におんぶしている面が非常に多いわけです。民間の企業というものの根本問題は、そこで、ある程度もうけなくては商売になりません。そこで色んな形になってこれが動いてこざるを得ないのは、至極当然でありましょう。そこに一つの大きな問題が存在しているのです。

## 日本の国内での海外協力への意識と姿勢

とくにその〇・二三％というような小さい数字にしても、それが一つの政策に沿って動いているのならば結構と言えましょうが、うではないんですね。たとえば、総理のところあるいはある特定の実力者のところへ話をもっていくと、それが借款その他の方法で案外簡単にきまってしまうのです。したがって、政府としてどうか、日本として一つの絵をかくて、ここにこれをやるのが真の協力親善になるんだという型のものではなく、ある実力者によって動かされるという民主主義の国においては、ない形態が、現実に行なわれており、そこに問題があるのです。したがって、そういう問題をいかにして打破するかということですが、残念なことに一番大切な国会の場などで、海外協力問題が国の政策として前向きにとり上げられたことがありません。せいぜい外交方針なり総理の演説の中に一行入れれば成功と云ったところですが、これは国会議員に海外協力に対する認識が少ないことと、選挙区でも支援団体にしても、これが票につながるという我国社会の認識に欠ける点があるからです。我々国においては諸外国とちがって外交問題、海外協力問題に関して、大いに力を発揮した人が次の選挙で黙っていても当選するということよ、うな、先進国並みの政治姿勢がないからです。又日本の国会議員には残念ながら、県議員か市会議員のやる仕事が多過ぎるのかもしれない。願わくば一人でも多くの真の国会議員が出てきてほしいものです。そこに日本の海外協力をする土壌があるのかないのかということまで考えられます。国会議員がこの有様では、官僚も本腰を入れなくてもやれるという安易な気持ちになってしまうのではないかと云いたくなります。そのしわよせが民間企業やその他に負



わされてしまうのです。これを抜本的に変えない限り、日本の海外協力はほんとうの意味において、中国のそれと太刀打ちができない。日本の土壌を変えない限り明るい見透しは持てない。我々はそういう現状をしっかりと頭に入れておく必要があるのではないかと思います。

### 中国の日本への態度

次に中国の関係を少し掘り下げて見ましょう。日本の軍国主義復活や経済侵略を大きく取上げていた中国は、最近特に四次防問題を大きくとらえて国内解説などで放送しています。この点日本人より以上にもっともっと大きくとらえられているのです。

四次防は大変有名な日本の軍国主義復活の材料となりました。内容の如何ではなく、四次防自体のとらえられ方によって非常に大きくとり上げられている問題なのであります。

### 日本人の中国問題に対する認識

そこで、中国が言う日本の軍国主義復活、経済侵略問題について日本人が如何に受けとめているかを考えてみましょう。

中国を訪問した政治家にしても財界人にしても、その殆んどはそれをそのまま聞いて帰り、或者はそうだ、日本はもう復活しているんだ。ある人はいやそこまではいつていないが、復活しつゝあるんだという程度で、まるで他人事のように論評している。結果は政府が悪いんだ。今の与党が悪いんだという議論だけで、自分自身がそれを分析して掘り下げて何が国益になるか、又中国の狙いがどこにあるかということに真剣に取り組む、真面目な討議が行なわれていないことは残念至極なことです。この問題は、少なくとも我々一人一人の日本人の頭上に太きくのしかかつてきている問題として取組まな

ければなりません。

### 中国のねらい

そこで私なりの分析で話を進めますが、中国のねらいは二つあるとみています。その一つはやはり何といつても日本と国交を回復するときの賠償問題、その一つの大きな材料、有利な材料として考えているのではないかということです。そこで賠償というものが賠償支払いという形になるか、あるいは経済協力という形になるかわかりませんが、いずれにしても、そういう形の大きな狙いがあると思います。一説では、日本には軍国主義が復活し再軍備をやっている。それは中国にとって非常にこわいし、先の戦争等によって大変被害をうけている経験があるので非常にこわがっている。だから日本には十分気をつけなければいけないということが言われています。それはそのとおり事実だと思います。しかし実際には、周恩来はじめ中国の指導者は、日本の軍勢力をそれほど評価して被害意識をもっているとは考えられません。軍事評論家によりますと、中国の現有軍勢力をもつてすれば六分で東京を全滅させることが出来るといわれております。つまり日本の現在の軍勢力を恐れる必要はないということなのです。むしろ政治的配慮の方がずっと強いと私はみています。しかしながら、このまま放置しておいて日本が段々大きくなるということは、勿論競争相手として非常にこまるわけですが、現時点において、それをただちに恐怖に結びつける考え方はないといって良いと思います。少なくとも周恩来首相についていえることは、それほど国際的感覚のない、それほど実情を知らない人ではないし、むしろ次にくるところの賠償問題との関係が、非常に大きなウェイトを占めてくるといいうことが第一点であると言えます。



第二点は、東南ア諸国に対する配慮を重視しているということである。日本の経済侵略という問題についてみても、パンコクの夜など、ネオンに色どられた日本色の空は、日本にいるような錯覚に陥ち入るほどです。最近にはバンコクばかりでなく、マニラをはじめ到る所で見受けられます。つまり現実のものとして、すぐ眼につくものがあるわけです。まず自動車ひとつとっても、タクシーにしても、日本の自動車が走っていますし、トランジスターにしてもそうです。環境的に現象的にすぐ日本の経済侵略に結びつけられる土壌がそこにでき上っているわけです。私が昨年の五月フィリピンに行った時、たまたまフィリピン財界の有力者が中国に行き、周恩来はじめその他の指導者と会って帰ってきたばかりの時でしたので、その運中に会って色々話をしました。その時非常に興味深い話をしてくれました。中、フ最初の会談のときに、周恩来首相はまず御国との問題については、第一に国交回復を願うこと以上のものはありませんし、それに大いに期待をもっています。しかし私は決してあせりません。フィリピンの国内状況がそういう気運になつてから大いに手を結びましょう。しかしその前に、あなたたちフィリピンの人民は、もっと足元をみつめなければいけませんよと言われたというのです。その内容は「日本はフィリピンに経済侵略をしています。したがって、貿易その他について十分考えなければいけません」と言われたわけです。およそ外交的儀礼の場では、第三国の悪口をいうことは、外交儀礼上の常識にはないことであり、特定の国において、秘密会議では使うこともありましようが、公式の場で堂々と使ってきたというわけなんです。これにはフィリピン側も非常に驚いて、私たちも心配したんだと話してくれました。

私はなるほどという気がしたのです。そういうことが今後くりかえされるならば、これは大変だ、誰でも最初には疑惑の眼で見、PRであると感じられますが、次から次へと言われますと、やはり人間というものはそうではなからうか、日本のやっていることはおかしいじゃないかという気になり、それが段々重なると、日本はそうなんだ、侵略なんだということになってきます。私はそれを心配するわけなんです。根拠のないことを申しているわけではありません。私は年に一回、あるいは二回、東南ア・アフリカをみています。その関係からその移り変りが非常にひどくなってきたことがわかります。とくに、一昨年までと昨年とは、非常に対日感情が変ってきているということをはっきり申し上げられるわけです。そういう状況ですから今後、非常に難しい状態がでてくるわけです。

私はこれからの問題に対処するに必要なことは、日本が今後いかなる方針をとるかということを決める場合、もはや日本だけの問題を考えて決める時期ではなくなってきたという認識をもたなくてはいけないということです。かつては日本と東南アのAならAという国との問題だけを考えれば良かったわけですが、ここに中国という問題が入ってきたので、三角関係になったということなのです。あるいは下手をすると、ソ連が入る四角関係にもなってくるのです。少なくとも、東南アの問題につきましてはソ連を除いて考えられない時期が早晩来る、いやすでにベトナム問題はその主役でさえある、又パングラ・デッシュ、インド等の問題についてはご存知の通りです。

## 中国の海外協力

これから中国の海外協力問題という本題に入っていきますけれど、



ニクソン大統領が訪中した後の動きの中心というものは、中国も  
うアメリカを対象に考えなくて、安心して東南アジアにでてこれ  
るという土壤ができ上りつゝあるということです。

中国は今まで、少なくともアメリカに遠慮しながら、東南アジア  
への進出を考えてきたのが、今後は独自の方針を強行出来る土壤が  
出来たということです。したがってこれからはソ連問題に配慮をお  
きながらの政策が進められると思いますが、東南アジアではさしあ  
たり大きな問題はないとみてよいでしょう。むしろ中国が優位な立  
場を堅持して進出してくることを前提に、日本の政策を考えねばな  
りません。

### 中国の海外協力の典型的な例としてタンザン鉄道をみる

さて東南アジア、アフリカに対する今後の中国の進出を考えると  
き、そのパターンというか手本としては、やはりタンザニア問題を  
先ずとりあげなければなりません。このタンザニア問題を一応認識  
し、分析し、それを土台に考えていけば、これから中国が東南アジ  
アにどのような形で出てくるか推察し得ると思います。そういう意  
味で東南アジアに入る前にアフリカの問題にふれていきます。

中国は一九四八年―六九年まで、アメリカの国務省の資料では、  
表に出ている海外援助というものはゼロであります。しかしこれは  
北ベトナムはじめ社会主義国に対する軍事費などは別として、少な  
くとも純然たる経済協力、技術協力問題としては数字が出ておりま  
せん。一九七〇年になって、これが七億九〇〇〇万ドルという数字  
になったわけです。そのうちで大体四億四一五〇〇〇万ドルがタン  
ザン鉄道に注ぎ込まれているわけです。その他にダレサラム軍港と、  
もう一つ最近モロゴロ空軍飛行場に手をつけています。これはジェ

ット機が離着陸できるところで、この建設を中国がやっています。  
(数字上には全然上っていません)。完成時には、練習機その他は  
中国から援助を受けるようですが、現在のダレサラム軍港に關して  
も、兵器類は全て中国からいっております。それだけでなく、昨年  
からは指導官も中国軍人になりました。もう一つつけ加えますと、  
タンザニアの警察関係の特高の訓練は北朝鮮が当たっているそうです。  
タンザン鉄道建設を中国が引きうけた事情

まず考えなければならぬのは、中国がタンザン鉄道を引き受け  
るにあたって最初から、タンザニアが中国に話をもっていたわけ  
ではないのです。はじめはアメリカをはじめ西側諸国にこの話をも  
っていたところ、誰も相手にしませんでした。というのは、この  
鉄道建設は経済効率がうすいという西側の見方がありました。と同  
時に鉄道の手をつけるということは泥沼に足をつっこむようなもの  
であり、つきこめばつきこむほど大変なことになるということで、  
敬遠したのです。アメリカとしては道路ぐらいなら何とかなるだろ  
うということで、ザンビアに鉄道と併行した道路だけをつくること  
には賛成したわけです。こういうわけで西側諸国は鉄道にはついに  
眼を向けなかったのです。

他方中国はケニアにおいて、アフリカ政策にイデオロギーを持込  
もうとして排斥をくらっていた時であつたので、タンザニアの申出  
を快諾し、アフリカ対策の拠点をタンザニアに移すことを決意し、  
タンザン鉄道の建設に全面的にとりかかったのです。ところが中国  
は協定を結んでも全然表に出て来なかつた。それで西側諸国では、  
中国は大風呂敷を広げて鉄道建設を引き受けたが、何ら手を打てな  
いではないか、やはり言うだけでまだまだ実力がないのだ、その見



方が大勢をしめ、新聞に発表していた国もありました。各国の外交官もそういう報告を本国にしたそうです。これは非常におもしろいケースで、どの国も中国は恐らくねを上げてやめるだろうという見方をしていたのです。

### タヌー党の青年を中国に招請した

ところがその間に中国は何に眼をつけたかというところ、一党専制政治をやっているタヌー党に狙いをつけたのです。というのは新しい国を動かすのは、その国の政党である。党の大方針として、これを動かすことも効果があるということに眼をつけたのです。

先ずタヌー党の若い青年諸君、これから将来幹部になろうとする青年諸君を中国に呼んだのです。日本の研修員受け入れ制度と似たようなものです。ここで興味あることは、現職の役人を一人も呼んでいないということです。役人には少しも眼をつけなかったのです。タンザニヤ、ザンビアの優秀な若手役人は、イギリス、ドイツに留学した者が多いのです。タヌー党の青年よりも政府の若い役人の方が学歴からみると立派であるにもかかわらず、タヌー党の若手を招待したわけです。たしかにタヌー党の若者は学歴等においては役人よりも低くかったが、建国の意気にもえた情熱の点では、はるかに役人より優秀であった。これを見ぬいた中国の姿勢が成功した一つの大きな要因と云えましょう。この方針は今後の中国協力には随所に出てくる方程式のようです。即ちどこを押せばどういう形で効果がでてくるかということを事前に十分検討して役人を呼ばないで政党員をえらんだのです。

この点、西側諸国とはかなり違うところです。我国でも研修員を入れていますが、開発途上国を一律にみて、中堅の役人クラスばかり

りを入れていきます。

### 心の通い合った鉄道建設

研修員を呼び入れると、タンザン鉄道の青写真を彼等と一緒につくり上げていったのです。もちろん、一緒につくり上げるといっても主役は中国人ですが、並行して語学の特訓をはじめましたが、それには研修員できたタンザニアの青年をスワヒリ語の先生に当てて、みっちり特訓をつづけ、両者の対人関係を作りあげたのです。

したがって、出来上った青写真というのは中国がつくったというより、すでにタンザニアの青年がつくり上げたと言って良いほどの心の通い合いをみつけたのだと思います。これが成功の強い要因であると言えます。中国は専門家を派遣する場合、現地の人々以上の優遇は与えません。現地の同格の人物と同じ扱いを受けることを大原則にしております。この様に云うと、朝から晩まで労働をしいられる昔のクーリーと同じように考えがちですが、現在の工人服を着た技術者には適当なレクレーションもあり、心のゆとりが見受けられます。こういう状態ですが、少なくとも表面上は現地の技術者と同格の扱い、待遇をうけるということです。これが鉄則として実際に現地でなされており、現地の人々の間に溶け込んでいるのです。

### 現地での民衆工作

そこで興味深いことは、鉄道建設だけの話ではなくて、Vjamma（ウジャマール）といって人民公社的なものを沿線の二・三〇〇ヶ所の村落につくり上げていったのです。この民衆工作は鉄道が建設されることによつて村落、地域がいかに恩恵を受けられるかということとを教育し、鉄道輸送と農産物又は地方産業にむすびつけた開発の拠点づくりをはじめ、その第一線で指導しているのが、中国で研修



を受けたタヌー党の青年幹部なのです。

## 六〇人の医者への派遣

もうひとつそれに加えて六〇名の医者を送った。これも日本や西側諸国の場合ですと、三人の医者を一カ所に派遣すると、医療協力云々ということで恩給せがましく云いますが、中国の場合医療協力をやってやるんだということも協定の中には出て来ません。むしろ逆に、自国の鉄道建設員のために派遣するのであって、タンザニアのために送るのではないから心配しないでほしいという程度のもんです。しかし現地に行っているのは、若い青年で、交代もかなり激しくするので病氣らしい病氣もないというのが実情です。

そこで六〇名の医者が実際現地でやっている仕事は何かというと、現地人は医者を見たことがないという者が多く、又タンザニアの医療制度としては医者に診察を受けるには、六段階を経なくてはならない。つまり五段階目に看護婦にみてもらう。やつと六段階目で医者にみてもらえるが、そのときにはすでに死んでいたと云う話すらあります。

ところが中国から行っている医者はそういう段階は一切取りません。とにかく直接来なさい、ほんとうに困ったときは夜中でも来てもよろしいという。こんなことはタンザニア人には、かつてなかったことで、好評を得るのは当然なことです。治療には薬を十分与えるし、ハリも有効に使われているそうです。特に薬よりも、ハリというものは開発途上国、特にアフリカ諸国においては神がかつていて良いそうです。これは非常に進歩した医学として、西欧医学を施すよりも評判が良いようです。又中国側の姿勢としてはあくまでも、現地の要望に応えると云う方針をとり且つ相手政府のためというの





は皆無です。現地での手当は同率に月二万円程度といわれており、食物はじめ生活に必要なものは全部中国側から支給されます。しかし、本国の留守宅に支給される手当は、国内で支給されていた月給の比率によるそうです。

中国はなぜタンザン鉄道の建設をねらったのか

中国がなぜタンザン鉄道の建設に狙いをつけたか大別すると次の三点が挙げられる。

第一に、中国がアフリカ諸国にとって同志的友好国であるとのイメージをうえつける外交的計算。このことはさきの国連において現実に証明された。日本の海外協力はどうかと云うと、政府自身は相当にうぬぼれているようであるが、私は援助額に対する効果の点では及第点に達していないと思う。

ここではつきり言えることは、中国が今度アフリカの票によって国連に復帰したが、ブラック・アフリカの票固めは、このタンザニヤ、ザンビヤにおける海外協力が大変大きな役割を果たしたという事実である。中国自身がアフリカ大陸からインド洋にかけての橋頭堡としてタンザニヤとザンビヤにねらいをつけた政治的な判断が重要な点だと思う。

第二点、タンザン鉄道を通じてタンザニヤとザンビヤだけではなく、ローデシヤ、南アフリカ等の白人国とブラック・アフリカとに焦点を合し、国際政治の場における信頼と地位の向上に狙いをもっていたという点です。

第三点、南部アフリカ解放ゲリラに対する影響力を考えたという点です。

タンザン鉄道に関する援助は、五年据置の三〇年年賦償還と言わ

れているが、それでは支払い時期をいつにするか、交換可能な通貨で支払うのか、その問題についてははっきりしていない。したがって、一説にはザンビアについては銅でもって解決されるという見方もされているのです。

以上の三点を分析すれば、中国は先づ政治優先の海外協力方式をとっており、今後この方式をとるであろうと云うことです。

#### アフリカへの中国の出方

しかしこれによって、今後中国がアフリカに対し海外協力をどんどん進めることにはないと思います。それほど中国自身に余裕がないし、中国自身は次の打つ手として、東南アジアに眼を向けていると判断すべきでしょう。それは現地側（アフリカ側）に中国が期待するような土壌が出来ていないことを中国自身良く知っている。

#### ザンビアでの中国の物産展

ザンビアで中国の物産展に出会ったのですが、大変大がかりのものでした。これが一年中アフリカ諸国を巡回しているわけです。この主目的は中国を認識させることに置かれており、日本のように貿易振興にのみ血道を上げているのとは大変異っており、我国もこのへんで考え方を転換しないと、アフリカからも嫌われる日も遠くはない様な気がしました。

さてそのザンビアの物産展の灌漑用水の展示場の状況です。それは三〇〇kmの山を打ち抜いて灌漑用水路を造り上げ楽園とした説明です。「今から三〇年前には日本の軍閥によって、この辺りの民衆は大変な被害をうけ、日々の生活にも困窮していた」この一句は観衆に大変感銘を与えていた。観衆に聞いてみると、現在の中国は大国である、しかしすこし前までは日本にやられていたのだ。それが



自分達の力で今日の中国になった。これが我々にも必要なんだ。真の独立国になるためには自力更生が第一だ。中国のこの啓発工作にも狙った二つの効果が着々とあがっているように見受けられた。

### 日本の海外協力の土壌

私はそれで思いだしたことがあるのですが、日本も東南ア・アフリカ等から研修員を受入れておりますが、それらの研修員は何が一番知りたいかと質問すると、「明治維新後、今日の日本を築き上げた努力の歴史」と答える。つまり技術をならうだけなら他の国でもよい。日本に来たのは、同じ有色人種でありながら日本人にはやれたのに、何故我々がやれないのだ。それを聞きたいのだということをよく耳にしたのです。

私はかつてOTCAの初代の国内事業部長をやって研修の受け入れ責任者だったわけですが、実際に一貫した日本人の建国努力史を話せる先生が少ないし、又それをやろうとしないことです。新しい科学技術については大変優秀な人はいるが明治維新後、苦しみの中から上、下一体となって懸命の努力を経た発展史。この発展史を話せる人が少なかったり、話そうとしない、日本という国は。本当に研修員を受け入れる素地があるのか、日本にきた研修員にとって血となり肉となり、自力更生の精神を養う為に、彼らに一番役立つと思うことを分ち与えることこそ必要である。それには研修員の同じ立場にたつて受入準備をすべきである。研修員との心のつながりを求めるとすれば、日本のおくれていた昔の恥部でもどんどん出し、研修員と裸でつきあう姿勢で研修計画に入っていかなければならない。これが日本の受け入れ事業に欠けている最大の点である。

東南アジアに中国はどのように出てくるか

中国の東南アジア進出について結論から言えば、中国はビルマ、マレーシアに最重点をおいた協力関係を展開すると考えられます。分析根拠については時間の関係から省略します。少なくともビルマ、マレーシアを味方につければ、フィリピン、インドネシア、タイは勞せずして中国の陣営に入ってくるという考え方です。つまりビルマ、マレーシア半島の源を押えることが中国の東南アジアに対する政治的な基本政策であると考えております。

#### マレーシアに対して

マレーシアについては先ほど岩田理事長が申されたように、昨年五月にはマレーシアから、又八月には中国から相互に視察団を派遣し、八月には両国間に貿易協定が成立し、四万トンのゴムを買付けるなど、マレーシアに対しては今後もし利害得失を度外視した貿易上の協力が進められるでしょう。又中国は貿易面と同時に小規模工業の分野においても農村地域を拠点とした、農機具等を中心とする農村工業の援助が行われるとみており、これは、住民の必要なものから初める大衆路線から開始されよう。

最近のマレーシアは日本に援助を申込んで来る場合、中国にも要請しているケースが見受けられます。特に、本年二月中旬、中国はマレーシアから農村開発の援助要請を受けたはずで、これは七二年の後半にも動き出してくる可能性があると思なければならぬ。中国の場合政治的に決定すると、表面に出る前に基礎工事としてかなりの準備が進められておると見るべきでしょう。これはタンザニヤの例をみても明らかなことです。

#### 華僑に対する中国の出入

中国は先づ華僑を対象にして考えていくだろうから、華僑政策を



みれば中国の動き方がわかるという意見をよく聞きますが、私はこの意見には反対です。六〇年代の前半にはそういう見方も出来ましたが、現在の推移を見ると、華僑、共産ゲリラに対して工作を行ない、優位な態勢をとろうとすると云うようなことは考えるべきではない。玄関から政府間ベースとして取組んでくるのが中国の姿勢とみてよい。マレーシアの場合、華僑との関係については昨年二月憲法改正がなされ、マラヤ人優先の基本姿勢が決定している以上、中国は内政問題にふれるような挙に出ることは考えられない。

又マレーシア政府の貿易実務の責任者等は中国系マレーシア人であることも我々は念頭におく必要があろう。

東南アジアの華僑の流れは非常にはっきりしている。一例をあげると、台湾政府の出先大使館の経常費は、大体五分の三は華僑系からの献金によると云われている。献金の方法は、大財閥が直接献金するのでなく、財閥には中国、台湾のどちらにもつける番頭的な組織があり、献金などはその線から処理されています。したがって国府から中共に変ったからといって、財閥は右往左往することは決してありません。

ただ、マレーシアの行政機関における中国人の地位については、最近、局長クラスも下げられており、その例を警察官にとってみると、中国人は警視正以上にはどんなに優秀でも昇進出来ません。この点、中国人系には大変な不満を与えているようです。即ち、マレーシアでは実業界には中国系が絶対的な勢力を有し、官界ではマラヤ系が絶対的である。これは中国にとって政治的に手が打ちやすいことでもあり、今後の中国の対マレーシア政策が注目されます。

## サバ州に対して

最近ある本に中国はサバ州に積極的な農業協力をするであろうと書かれていましたが、私はその説には反対で絶対あり得ないと思っております。その理由として、サバ州には現在中国の援助を受入れるような環境が出来ていないと云うことです。共産ゲリラとの関係マレーシアとの関係等々、むしろ現状通り中国米を輸出することの方が中国にとって得策であり、政治的效果を期待出来ないことを熟知していることが挙げられる。

## インドネシアに対して

スハルト大統領が二月にオーストラリア、ニュージーランド、フィリピン等をまわっています。これは中国を対象に地域的な経済協力機構、軍事協力問題を話合うためだったと云われています。

ここで興味あることは、インドネシアの考え方とは逆に、中国はインドネシアを、アジアにおける中国の代弁者と云うか影武者として活用したい意向が強いと思われることです。中国が狙ってくるアジアの政治問題としては、エカフェ等の国際会議の場を通じて中国自身が旗を振るけれども、東南アジア側（開発途上国）から旗を振る国として中国はインドネシアの活用を期待していると見受けられる。

東南アジア諸国では華僑学校は閉鎖されておりますが、インドネシアでは現在三〇校ぐらい開校が認められています。つまり、インドネシアでは華僑の経済力の必要性を痛感し、華僑対策を変更した証拠です。したがって中国はインドネシアに特殊なつながりをもつてくると見なければなりません。今後のインドネシアはアジアにおける政治の面で如何なる出方をするか、中国との関連において十分注



目する価値があります。

#### フィリピンに対して

中国はフィリピンに対しては自分から積極的な手を打たず、むしろフィリピンが出て来るのを待つという態度をとるものと思われる。すでにレイテの州知事が二月には周恩来にも会っております。マルコス夫人が三カ月以内に中国を訪問をするとも外電は伝えています。情勢としては、中国の狙いどおりに中国自身が手をうたなくても、フィリピンに対するアメリカの援助削減と反比例して、中国に向っていることがはつきりと出てきています。恐らくこの情勢は今暫らく続くものと思われれますが、マルコス自身の考え方も次第に中国寄りになりつつあると云えましょう。

#### タイに対して

タイに対しては、中国は直接手をつけずにおくのではないか。タイは人口の約一〇％が中国系です。そのうち三〇万ぐらいが華僑で、その他はタイ国籍になっております。タイに生れた軍事政権は、中国の国連復帰に対応すると云うより、国内問題を考慮したものであって、直ちに治安その他に関係したものではありません。たしかに北方に二部隊、南方に一部隊の共産ゲリラがありますが、現時点においては、これはあまり重大に考える必要はなく、むしろアメリカが西海岸の石油開発計画から手を引くということ、又国内の特需関係等からみて国内の引締めに先手を打ったものとみられ、中国に対しての直接処置とは考えられない。たゞ、中国は外交上タイに働きかけを強め、タイ国内の親中国派の活動を援助するであろうが、経済協力関係では積極的な援助は行っていないとみてよいでしょう。タイの外交は常に両面作戦をとっており、どちらにころんでも甚大

な被害を受けない国民性をもつておることも参考とすべきでしょう。ともあれ、中国はタイに対し積極的な態度には出ないと思われる。

### ラオスに対して

ラオスとネパールについては、中国は積極的な態度に出てくると思います。ラオスに関しては早ければ本年度後半には具体的に何らかの手を打ってくるものと予想しております。ラオスには、ベトナムやカンボジャとは異質の国内条件があること、又大国の直接介入がないこと等が容易に中国の接近を早め、中国の政治的働きかけが強行されることが予想される。今後ラオスが社会主義国家になるかどうかは今後の戦果と、民衆把握によつて決まってくるでしょう。こゝで大切なことは日本をはじめ自由陣営がラオスに対する援助の手を抜いてはいけないということです。ラオスの将来は、この一年で決定づけられるとも云えるほど大切であると判断しており、今こそ人道的立場において積極的な援助を行うべきであります。その場合考慮すべきことは、人道主義的立場における援助、無償協力をヒモ付きでないものでどんどん援助すべきだということです。

### ネパールに対して

ネパールは現在大変微妙な立場におかれており、中国は現在もかなり思い切つた援助をしておるが、今後は一層強化されるものとみられる。ただネパールの場合、国際政局において非常に危険な立場におかれており、これがこの国に与えている影響は極めて強く、同国の発展に暗い条件となっている。インド、ソ連、中国という大国の谷間になつているネパールの今後については、最大の関心を払うべきですが、日本としては、ネパールに対する大国の態度とは関係なく、人道的立場から積極的な援助・協力をすべきです。



## 日本の海外協力について

日本の海外協力は如何にあるべきか、一言にして云えば政府の援助額を思い切つて増やすこと、近視眼的に目先のことのみ考えないこと、被援助国の立場に立つて行うこと、以上である。

援助や協力が三年や五年ではね返えつてくることを期待するならばむしろやめるべきである。海外協力というものは一〇年から二〇年という長いマラソンだと考えるべきである。思い切つた援助をすることによつて、そのはねかえりが政府関係だけにかえつてくるのではなく、長い眼でみて何らかの形で双方の関係にはねかえつてくることが、海外協力の真の姿であり、狙いでなければならぬ。

日本が考えなくてはならないのは、資源確保とか貿易振興とかが前面に出るのではなく、相手の立場に立つた善意の協力をすべきだということだ。海外協力は、常に相手の立場にたつて、相手が自立更生できるよう心の通ひ合つた援助協力を行うものでなくてはならない。それには政府がヒモ付きでないものを政府自身でやる以外に道はないのです。一企業がそれをやろうとしても無理なことは言うまでもありません。最近、四次防問題が大きくていますが、日本が再軍備しなくてすむには海外協力以外にないと思う。いくらきれいな事を言つても、経済が伸び、産業が発展していくということになれば資源の確保に力を入れざるを得ない。それには必然的に過去の歴史が物語っているようなものがくり返されてこないとは誰にも保証できません。したがつて、それを打破できるのは、ほんとうに生きた海外協力以外にないと思うのです。腹が立つてケンカしてもなぐり合えるほどに相手と知り合つて、肩を叩き合つて気持の通ずるためには海外協力しかありません。それには政府が思い切つた援

助、協力を行なうべきであります。

今、日本にとって一番必要なことは、国内の社会問題もさることながら、日本の将来を考えれば、海外協力問題が国会でも真先にとり上げられて審議されるぐらいの重要な政策となることです。

とはいえ、現在の日本の海外協力がそのまゝで量さえ増やせば良いほど簡単なものではありません。少なくとも実施全般について考えなおす必要を痛感します。機構、姿勢についても官僚的な考え方ではなく、流動的な開発途上国に対処できるように改革する必要があります。又、海外協力にたずさわる者の姿勢についても常に自分をまないたの上にして、自分のやっていることが正しいかどうかをふりかえってみなくてはならない。もし間違っているなら、いついかなる時でも改めるだけの勇気と責任感をもってもらいたい。

とくに今後の海外協力においては、中国がやっているような、というよりは私が昔から言ってきたような、相手国の立場にたつて心の通い合う、相手に愛される協力をするのが大切です。その意味において、青年を扱う青年協力隊は技術ももっているし、相手の中に飛び込めるといふ青年の力、若さでやってきたことを正しく認識し、海外協力の中に織り込んだ正しい位置付けが必要であると思います。協力隊自体についても今後のアジア情勢では、実施のあり方によつては早晚問題が出て来ると思います。先般香港で国際問題の専門家である中国人と話をしたとき、中国も青年による海外協力が効果があると思っている。しかし今は残念だが自信をもつて青年を海外に出せないが、当然考慮に入れた海外協力の計画が進められるであろうと言っています。

ともかく、今後の海外協力問題で非常にむずかしくなることは中



国が一枚加ってきたということです。近い将来具体的に種々の問題が出てくるでしょうがそういう土壌ができ上りつつあることを認識すべきです。実施に当る者が役人的な安易な考え方で量さえ増せばよいと云う現在のやり方では、反感を招くだけに終りそうです。今後の日本の海外協力は、我国にとって如何に重要な課題であるか、政治家も政府も民間も、関係者一同が一体となって考えてみる時期が来ていることを痛感します。

民間商社に希望したいことは、もうけることばかりを追求するのではなく、そこにも必要な血となり肉となるものをつくり上げていかなないと、気がついた時はアジアの孤児になつていたということになつてしまふのではないか、そういうことを心配しています。

時間の都合で大略的に終つた部分もございますので、ご質問して頂ければお答えします。

司会 引きつづいて質疑応答をおねがいますがどなたからでもおっしゃって下さい。

「質問」 私も専門家として東南アジアに行つて、お話しになられたようなことを実際に考えて早目に帰えつてきたのです。お役所が考え方を変える見込みはありますでしょうか。

「応答」 他人が変えるのを待つていてはだめです。一人でも二人でも変えていくことをやっていかなくてはだめです。変わる見込みがあるかどうかでなく、変えさせるように努力することです。

「質問」 私も機会ある毎に言つてますが効果がありませんね。

「応答」 効果のあるようにしようじゃないですか。海外協力問題というものの、特に開発途上国の問題は経済協力を母体にして考えるべきでしょう。開発途上国との外交はパーティや為政者と話し合う

だけではなく、協力、援助に重点を置くべきでしょう。

「質問」 個人個人が不適格というのではなく、国の方針が変わるかということですが。

「応答」 それはお役所だけが悪いのではなく、政治家をはじめ国民の考え方も変えていくべきです。

「質問」 今のやり方は効果を急ぐわけです。一〇年待たなくては実効の上らないのを二、三年でとせかせるんですね。

「応答」 今、日本には海外協力を真面目に考える国会議員が少ない。ほんとうの国会議員がでてくれば変わってきますよ。もし変わらなければ日本は孤児になってしまうと思います。

「質問」 もう半分孤児になっているのどこがいますか。インドネシア人、中国人でも親しい人から忠告されるんです。これでは日本はだめですよと言われるんですね。

「応答」 私もその点を一番恐れています。私もこの一〇年間毎年諸外国を歩いてみて、そういう動きを感じておりますが特に二年前くらいから非常に変わってきました。昨年末各国を歩いたのですが大変な変わり方です。早晚問題が出てくるような感じをうけました。然し、問題が出る前に姿勢を変えなくてはいけないと思うのです。

「質問」 中国はアジア、アフリカ以外の大陸にもアプローチしていますか。

「応答」 現在、貿易問題で中南米からボールを投げかける形勢があります。四月十三日からチリーのサンチャゴで開かれる国連貿易開発会議がありますが、その関係からアプローチした形跡があります。たしかチリーに対する援助協力問題が出てきていますが、これはチリー側から中国に対して調査団を招請するような形で、今度の



会議を利用して何らかの芽が出て来そうですが、具体的には今のところ何もありません。

「質問」 最初中国がケニアにイデオロギーをもち込んで失敗したが、次にタンザニアで中国が大変な成功を収めているようですが、その後ケニアはどのような判断をしておりますか。

「応答」 東アフリカ三ヶ国には貿易協定があつて、三ヶ国の年間貿易の基本ができてゐるわけです。ところが中国が今度援助するに当つて、中国からの製品をタンザニアは買うことが取り決められておるため、今年はケニアからの買付けをやっております。これは近い将来二国間で問題化することが予想されます。

もう一つタンザニア国内で難しい問題は、タヌー党の若手と政府の若手との間に対立が芽生えてくる可能性が考えられる。例えば予算編成に当り、省内又は政府事業体の内に目付け役としてタヌー党員が常駐しており、この者の承認を得なければ正式に省の予算編成が出来ない。これは中国のやり方と同じシステムです。今のうちに権限が違えばあまりケンカになりませんが、感情的には役人側にたかぶりがあるようで、この解決は指導者の課題と云えましょう。

「質問」 台湾問題に対する常識というものを我々はどのようにもてばよろしいでしょうか。

「応答」 私も皆さんと同じように台湾には友人もあり同情もしています。しかし、いまさら中国が二つなどというのは間違つており、中華人民共和国政府が唯一の政府であることははっきりしています。国連をみても現実問題としてははっきりしています。政府が現存しており、古来からの領土を治めておるものを、それをとにかく言うことは過去の世界史においてもないことです。

又現実問題として、国府の蔣介石政権が台湾に逃げた時、アメリカはじめ自由陣営諸国は当然の領土として保証したことは事実です。その現実問題からみても台湾が中国の領土であることは明確です。国際法からみてもはや異論の出ようはありません。ただ一つ残るのは日華条約の問題です。中共が全土を統轄したのは昭和二四年で日華条約を結んだのは昭和二七年です。その間三年経過していたことは事実ですが、当時の日本の立場は自由に物を言える立場でなかったことも事実です。然し現在の日中関係は法律論で片付く問題ではなく、感情問題も含んだデリケートな問題になっております。

そこで中国の唯一の政権は北京政府であり、台湾はその領土であるとはつきり認識すれば、前条約破棄の問題は個人的な感情をぬき国家的見地に立つて高度な政治判断により善処すべきであり、必要なことは先づ中国政府と国交の回復を決定することが先決です。その上でトラブルを如何に善処し円満に解決するか、それこそ政治家や外務省の重大な責任であると思います。この際国会議員も、何党、何派と云うのではなく、我国の国会議員としての態度をもってもらいたいものです。

又当然のことながら手をさしのべていかなければならないのは日本側の側であり、戦争が終結していない状態にあることを念頭において、相当の腹がまえで礼儀を尽くすべきだと思います。

「質問」 今後中国は東南アジアに強力に援助協力を推し進めるということですが、中国自体にそれだけの余裕、資金力がありますか。それとも余裕なくボチボチということですか。

「応答」 中国がタンザニアに援助、協力をした当時、余裕があったかどうかをみれば今後の中国の出方もはつきりわかってきます。



現在、衣料の配給をしているのは、東南アジアでは中国と一番国民所得の低いと云われているビルマだけです。中国の場合資金に余裕があるなしと云うことより政治的決定が優先すると云うことです。政治的判断を下せば国内のあらゆるものを犠牲にしても、やるというのが中国政府の方針と思われます。そういう点から現在眼に見える金はどうであるかでなく、やる能力と可能性が強いと見るべきです。日本のように金があっても思惑がからんで中途半端なことをするのでなく、目的のためには他のものを犠牲にしてまで注ぎ込むということですから、これは恐ろしいと思います。

「質問」 今までの日本とこれから進出してくる中国とは現地においてどういう関係になつてきましようか。

「応答」 その関係が具体的にわかれれば苦労はないと思います。中国の動きが具体的に出て来ないところに問題点があり、それを模索しながら対策をとっていくのが今できることではないでしょうか。

東南アジアで重点的に見られるのは、ビルマとシンガポールを含めたマレーシアで、ここには政治的な観点からの援助が行なわれると思われる。中国の援助体制をみると、現在の日本のシステムでは対抗できそうもありません。今後の援助、協力には資金援助だけで勝負がつくものではなく、最後は人間による協力によつて決まってくると思います。そこで、技術協力が非常に重要なこととなつてくるし、商社の出先の人と現地の人々とのつながりが大切になつてくるわけです。日、中間に国交の回復がない限り「軍国主義」「経済侵略」等中国はくりかえし行なつてくると思います。その中で協力し合うのですから苦労多いことゝ思います。

つまり、これからは一つの土俵の中で日、中開発途上国の三角関

係の相撲をとらねばならないので、どちらが開発途上国の心をつかむかが鍵になってくると思います。要するに人間対人間のつき合いができるかどうか、信頼し合えるかどうかということでしょう。

これから東南アジア諸国と親善交友の面を求めていくには、外交官ばかりにまかせるのではなく、外に出た人各人が現地人をいかにつかみ、信頼を得るかが大切なことで、中国との間にも競合するのではなく、相互に協調し合いながらもっていくことです。東南アジアで協調し合い、それを伸ばして中国本国との技術協力の分野までのばしていく腹構えをもたなくてはいいのではないか。現地ばかりではないということです。

「質問」　そうしますと、中国は採算のとれないような農業開発に進出してきて、日本はすぐ市場に出せるような工業の開発に重点をおくという二つの方向に分かれるということでしょうか。

「応答」　いえ、中国は農業協力にはあまり力を入れないでしょう。一つの例ですが十二年前ビルマで当時参謀副長だったオンジー氏が屯田兵制度というものをつくったとき、最初に中国が援助に当たったがбойコットされ、次にアメリカからの機械援助も断り、日本に協力援助を要請してきたことがありました。

そういうこともありますが、現在の中国自体は農業協力の分野にはあまり力を入れておらないようで、むしろ民衆の生活と直接すぐ結びつく小工業に進出してくる傾向が強いと思われる。とくに、ビルマには農業機械や繊維工業の面が考えられているように思います。恐らく、この傾向は他の国々にも一応考えられましょう。しかし、東南アジアにとってはまだ農業協力は重要で必要な分野であり、前にも申しましたが日本政府は積極的に資金、技術両面でじっくり腰



を据えてやっていくべきだと思います。

「質問」 シンガポールに対しては現在ソ連、イギリス、日本その他の国が激しく進出し合っていますが、中国はここに対してどういう態度をとりますか。

「応答」 中国側から眼にみえるような援助というものはしないと思います。むしろシンガポール側からの出方で今後の関係が生れるとみています。たとえば、最近船舶の運行契約がシンガポール側から要請し決ったようですが、中国がシンガポールに進出する方法としては、貿易の面を通じ、特に日常品に重点がおかれているとみていますが、シンガポール国民の对中国観を強めることに重点をおき、経済的に度外視した製品をだすというやり方をとると思いますが、政治的には過激な行動に出ることはないと思います。他方、シンガポール側も李首相自身温和な民主主義国家の建設をモットーにしており、中国に対しても、その基本線でアプローチが行なわれるものとみております。

「質問」 タンザン鉄道の技術協力に対し中国が大量な人員を送ったとのことですが、今後日本もそういう形をとるべきでしょうか。

「応答」 私は経済協力、技術協力において一度に一ヶ所に大量の人を出すということはマイナスの面が多いと思います。

タンザニアの場合は鉄道建設ということで、現地の技術のない者を教育しながら進めていったのでは何年かかるかわからない。それを七年の予定を四年でやってしまおうとして技術をもち同時に重労働をやる者を送り込んだので、中国の場合政治的配慮から出たものであって、通常行っている技術協力とは別なものであると理解してよいのではないでしょうか。だから現地で鉄道建設の技術を教え

ているというのではなく、見方によっては戦場と同じように自国の偉力を誇示したものと受取れます。

「質問」 ネパールについて話して下さい。

「応答」 ネパールへの援助は非常におくれ、海外援助の谷間ともみられていました。軌道に乗りつゝあるのは、ここ三、四年です。大型のものは中国からの道路で、巾二〇―五〇メートルの立派な道路がインドまで通じました。今はダム計画を進めています。中国がやる場合、なかなか数字がつかめないし、数字より多くのものが実際に動いているようです。

ネパールには農業と医療に協力援助が必要だとされていますが、中国は農業関係には手をつける意志はないようです。ただ民生向上福祉ということで医療協力に力を入れる様子で具体化しつつありますが、これは中国側から計画が出されたわけです。道路、ダムにしても同様です。というのはネパール側から要請を出すということはありません。これは悪気があるとか頭を下げるのがイヤだとかいうことではなく、ネパール側としては援助国側から具体的に援助計画をもってきてくれればそれで話しはOKだということなんで、日本の場合相手国の要請がなければ援助、協力は行なわないと云う原則を打出しており、これではいつまでたってもイタチゴッコになりかねない。このへんで、日本も気のきいた協力方式を打出さなければ、開発途上国から総スカンをくいかねない。

現在、日本からも協力がなされていますが、問題になることは十分な基礎調査がされていないということです。雨期には全く交通がしゃ断されてしまうのに、調査は一番条件の良い時期に入やすいこともあつて調査、計画を進めてしまう。調査とは時期の悪い時も含



めて半年ないし一年は腰をおちつけて調査し、結果が直ちに実施計画になって具体的に動いていくのでなければならない。

「質問」 中国の援助、協力が政治的判断で行っていると同時に人道的な配慮も行なわれている。この両極端が一諸になつて援助、協力が行なわれていることを我々はどう整理し、うけとつていけばよいのでしょうか。

「応答」 中国の場合、海外協力の基本姿勢は政治的判断により外交上、政治上に最重点が置かれ、どのくらいの援助をすれば自力更生につながり、失敗がないか等政治的な配慮効果というものを第一に考えるわけです。そこで一つのプロジェクトを計画する場合、自力更生ということで、国民大衆の側にたつていかにプラスになるかということが政策の中心の柱となっています。大衆路線というものを常に配慮していると云えましょう。

「質問」 華僑をどのようにとらえていけばよいのでしょうか。

「応答」 実業界、経済界をにぎっているのは華僑ですから度外視はできません。華僑というのは本来その国の国籍をもたない者のことですが、通常華僑と云つても六〇年代の初とはちがい、今ではマレーシア、シンガポールの中国人は夫々その国籍を持っており、正確には中国系何々というべきで、華僑というものに対してはつきり区別した認識をもたなくてはいいけないと思います。

東南アジア諸国の経済問題を論じる場合、中国系を抜きにしては考えられないほど強大です、今後の活動傾向としては次第にその国の国民としての行動を取ってくるでしょう。今後は中国系と華僑というものはつきり分けて考え、昔からの華僑への考え方を捨てない限り東南アジアの問題は混乱して誤解を招くと思います。

(閉 会)

## 中国の農業（講演）

講師 城野 宏

日時 昭和四十六年十一月十二日

場所 経団連会館

中田 農業開発研修センター理事の三橋さんが、ちょっと遅れておりますので、財団の理事長の岩田からごあいさつさせていただきます。

岩田喜雄 中国問題はあえて私から申しあげるまでもございませんが、中国が貧農路線によって、数億の人民が農業の発展に真剣にとり組んだ時、日本を含め東南アジアにどういう影響及ぼすかということは、イデオロギーとか政治を抜きにして、私たちアジアの農業問題に関心をもつ者から見えば、ひじょうに大きな課題になるということは皆さんご理解なされることと思います。

古い話ですが一九二一年ローマで世界優生学大会があったのであります。その時早稲田大学の内田和民先生が日本の代表としてローマに行かれ、お帰りの時にシンガポールに立ち寄られたのです。わたくし当時シンガポールを中心にして農業問題で、大倉喜八郎さんの所に関係しておりましたので、シンガポールに集り優生学大会の話聞きました。そのとき、内田先生の言われるには、ローマの大会では、将来ゲルマン民族が世界の中心的民族になるか、あるいはラテン民族になるか、色々の意見があつたが、その中でも百年後には漢民族が世界を制はするのではないかという論議があつたということ承つたのであります。ところが中国の歴史をみると農業路線



がいつも下敷きになり、権力の中枢はいつも富裕農層を中心に支配されて今日まで来たことがわかります。今度の毛沢東路線が本当に彼の思想の中心である貧農路線、あるいは中農以下の路線で成功した時、そしてあれだけの体格と国民性を持った民族をいしづえにして、毛沢東路線が本来の目的を達成した時、アジアの農業は色々な面から影響を受けると思うのであります。具体的には大豆の問題、とうもろこしの問題、あるいは広東、海南島を中心とした亜熱帯植物の問題、あるいは米、棉などについて、私たちは今後大いに研究検討しなければならぬと思うのであります。これらの各論については追って逐次講演会、研究会をもつことにいたしまして、本日は中国問題について、ひじょうに深いご理解をもたれておられる城野先生に、中国問題の序論と申しますか、大きな観点からお話を願うことが出来れば、今後各論に進む前提としてひじょうに有意義なことと思ってお願ひした次第であります。

中田 それでは共同主催になっております農業開発研修センター理事の三橋さんから、一言ごあいさつをお願いします。

三橋 誠 本日は先ほど申されましたように、その道の研究者である城野先生から色々お話を承って勉強しようという事ですが、じつは私のところの全購連としては十数年前から、中国の農協の購買販売連合会であるキョウ商合作社とお互いに交流しようという事で行き来しておるのです。しかしここ二、三年向うが来る番なのに、来ないという状態になっています。日本の農業関係の代表者が日本の代表者だということを周恩来首相が言っておりますが、私たちとしては今すぐ行く必要はありませんので、あえて中国へ伺うとは言っておりません。私最近ひじょうに関心をもっておりますのは、中国が

ら野菜を入れたとか、牛肉を入れるというような事を商社関係で言っています、こういうものがジャンジャン入って来たら、たいへん問題だと考えております。それから数カ月前から台湾の冷凍野菜が日本に入って来るといわれているが、これは困ったものだと考えておったわけです。むしろ中国と交易をして、日本に不足した時に入れてもらうというような調整を話し合うためにあちらへ伺いたいというふうに考えているわけです。本日城野先生はどういうお考えであるか、いろいろお話があると思いますが、農業団体としてはもうすでに十年も前から交流しておりまして、当時の陳毅外務大臣も「もう農業団体どうして貿易をやる時期が来ておるなあ」と言われました。しかしそうやたらに牛肉を入れられたり、商社の手で野菜を入れられたら、今でも日本の農業が混乱しているのにますます困ると思うんです。この席をかりましてそういう問題点があることを一言申し上げ、私のごあいさつにさせていただきます。そういう点についても城野先生からいろいろお聞きしたいと思っていますので、どうぞよろしく願います。

城野講師　城野でございます。今日中心課題として出されました問題は、中国の農業がけつきよくアジアにおいて、どういうふうな影響をもつだろうかということだと思えます。この問題を大戸君から出されたのですが、今日これからお話することが、それにぴったり合うような答えになるかどうか、ちょっと疑問なんです。この種の推定はなかなか難しいと思うんです。それで今日は、皆さんがどうすれば中国に関する理解を深められるか、いわば日本での中国に對しての理解の仕方と言いますか、そういう事についてお話を申し上げます。



多過ぎる中国情報 このような前提を置きまして、それじゃ中国というものをどう見たらよいか、その農業をどう算定したらいいかという問題になつてくると思いますが、これは単に情報がある、ないの問題でなくて、入手しうる情報をどう取り扱い、どういうふうに分析し、推理したら本当の姿がつかめるだろうかという事になると思うのです。中国の問題について、現在日本ではたくさんの方が出ています。おそらく中国についての情報が一番たくさんあるんじゃないかと思うんです。本屋へ行きましても中国問題を扱った本は、一角をなしてズラッと並んでおります。アメリカについてもかなりありますが、中国に関する本はみんな日本語になつていて、日本語になつて出ているデータ、資料というのは物すごくたくさんあると思うのです。たくさんあるので、あれこれと読みますと、みんなちがった事が書いてある。そのために本当にこれは右なのか左なのか、白いのが黒いのかどうも見当がつかないというような事になつて来るわけです。とくに中国については情報過多の状態にありますので、これを整理して実態をつかむには、かなりの工夫を要するのではないかと考えます。

二つに分かれる中国情報 今、中国について流されておる情報を、簡単に分けますと、くさし派とほめ派の二つになると思うんです。くさし派というのは中国は大変悪い所だと、なんでもまあくさす事になつています。政治的にも混乱しておつて毛沢東という独裁者が居つて、共産主義つていう悪い事をやつておつて、そのために強制労働の苦しみを受け、文化も弾圧されている。だから経済はさっぱり発展しない。通り文句になつていゝのは大躍進の失敗、人民公社の失敗によつて中国の生産力は大きく低下した。まあそういうふう

な事がいろいろ書かれております。果たして低下したのか大きく  
なったのか、書いた人自身もあまり自信はないのではないかと思うの  
です。いろいろの数字、たとえば国連統計とか、あるいはその他ホ  
ンコンで作った数字だとか、そういうものを見てみます。どちらに  
でもとれる事になります。躍進した発展したという結論を出すこと  
もできるし、低下してもう駄目なんだという結論を出すことも出来  
ます。だからそういう数字そのものについても、どういう所から出  
て何をここで表わしているのかという事をよく考えなくてはならな  
いと思うのです。一方ほめ派は中国については、なんでもほめる事  
になっています。毛沢東という素晴らしい人物がおって、ちゃんと  
統制がとれており、混乱がなくて、国民の目が輝いておって、張り  
切って働いていて、経済は発展しているというのです。なんでも立  
派な事になるわけです。実際に向うへ行行って見てこられた方の報告  
でもこの二種類になっているんです。ほめる方は立派な所をみんな  
見てこられて、その立派な所を報告されますので、あれだけの大き  
な所が全部立派になっているような印象を受けてしまう。ところが  
くさす方になりますと、色々くさしていいような場所をたくさん探  
して来て、それを集めてやられますので、あの大きい所が全部駄目  
なような、そういう格好になってしまいうのです。これはやはり手法  
の問題だと思のです。発表のプロセスなり、整理のプロセスが問  
題であって、実態の一面を表わしていても、全面的な観察になって  
いないように思います。これは中国に限らず、日本、ヨーロッパ諸  
国、アメリカ、あるいはアフリカ、アジアなど、とにかく世界中ど  
この国についてもそうです。立派な所もあり、あまり良くない、ま  
ずい所もあると思うのです。これが物の実態だと思ひます。



中国のイメージと実際　だから中国についても同じことであって、悪い所とか良くない所とかを探し出せばあんなに広い所ですから幾らでもあると思うのです。特に中国については、裏だけを見ようとか、表だけを見ようとか、極端な姿勢がかなり流行しておりますので、まずその辺から正す必要があると思うのです。日本国内のニュースになりますと、かなり正確に理解できるというのは、実際に国内で生活し、表と裏をちゃんと見ておりますから、あまりだまされない。たとえば殺人事件は稀れにしか起らないから、事件としてニュースになるわけです。中国の問題も同じことで、新聞とか雑誌とかにワートツと出るような事はやはりニュースです。同じように、毛沢東選集かなんか持つてワートツと言っている連中の写真が出たり、毛沢東思想教育のなされている状況として出されたり、労働模範とか、労働英雄とかの事蹟が出たりします。そうするとそういう人物が八億全部であるかのような気がしてしまうのです。これは間違いだと思います。八億の人間全部がそうなっているように感じさせ、みんな筋金入りの、人間離れた共産主義者だというイメージを作り上げて、中国の人間はみんなこんなになって、こうやっているんだとしている。そのような設定をして中国の政治問題、経済問題、また農業問題を理解しようとしたら、これは出来っこないと思うのです。いちばん根本的なことはなにかというと、そういうふうに極端な事を拾い上げて、つまり日本との共通的な基礎を抜きにして、特異性だけを取り上げてゆきますと、中国という所はそこに住んでいる人間もなにか人間離れしていて、気違いじみた人間がやつとるような気がしてきます。そして農業生産なりその他の生産にしても、何か特別のものが存在するような気分で見えていく。問題の観

察にはその姿勢が大事であつて、それが正しくなければ真の実感はつかめないと思うのです。

**中国を見る目** それで中国と日本の関係については共通性が主だろうか特異性が主だろうかと言うと、私はやっぱり共通性が主だと思ふんです。やはり生きてゐる人間の生活が中心になっていますから、物に対する感じ方なり、生活の姿勢なり、社会生活上の規約的なものについては、共通性の方が多いと思うのです。ちよつと冗談のように聞かえますが、目が二つあつて鼻が一つあるという基本的事実は、人間としての共通性であります。この共通性が主だという事を根本にして、特異性というものを見なければ中国の特徴が分かりません。特異性だけが存在しているのであれば、全然別箇の世界なのであつて、理解できないはずです。共通性が主になっているから理解も出来るわけです。ですから先ほど申しましたほめ派にしてもくさし派にしても特異性だけを、日本と非常に違つた点だけをとりあげてうんぬんしているのです。だから中国問題の観察ではそういう共通性というものの、基本的な事においてはあまり変りがないという観点に立つて、しかし同時に特異性がくつついてゐるというふうに見て来ると、割合に正確に中国が認識出来るのでないかと考えます。特異性だけを取り上げて、中国はああだこうだ、と言つていきますと、まったく化け物みたいな人間や氣違いじみた社会がそこに書き出されてしまう。こういう観察は、本屋にたくさん並んでゐる本の中にかなりあります。みんなその人たちの得てゐる概念と言ひますが、中国についてのイメージは、かなり特異性を主にしてゐて、とんでもない違つた社会であり、とんでもない人間が住んでゐるというような印象を強いてゐるようです。その辺を修正して問題を観察して



いく必要があるかと考えます。これは觀察に際しての基本的な姿勢の問題だと思ひます。

**日本と中国農業の相違点**　そこで中国の農業という事になりますが、この特異性と共通性、とくに共通性を根本に置いて特異性を調べるという観点から考えてみます。まず、作物の種類は米、小麦、豆類、野菜、その他柑橘類が主で日本とあまり変りはない。揚子江から南の方へ行きますと大体米作中心で、主食は米です。また農作物の栽培方法も、別に違いはないし、畜産や水産も、多少の違いはあつても大体同じで、共通性が主体となつてゐる。それでは中国の農業はいつたいどこが日本とちがつてゐるかと言ひますと、それは「生産組織」がちがつてゐるのです。日本でも協業経営とか生産集団とかその他集団的な経営組織のようなものが出来てゐるようですが、基本的にはほとんど自作農を中心にした生産組織となつてゐる。ところが中国のばあいは、土地や生産手段の所有形態が殆んど集約的になつてゐて、人民公社と呼ぶものによつて生産がなされてゐる。この点が日本とちがつた点だと思ひます。ですから中国農業の特異性をはつきり認識していくためには、人民公社という生産組織がどういふふうになつてゐるかを、一応頭に置いてかからなければならぬと思ひます。

**人民公社とは**　人民公社と言ってもやっぱり人間による生産組織である点では、日本の自作農形態や、イスラエルのギブツと本質的な違いがないわけです。なんだか人民公社とは特別のものであつて、人民公社になつてしまふと途端に生産があがり、なんでもうまく行くんだというように言う人もあります。反対に、人間の土地所有本能を無視した強制だから、それが失敗のもとで、そのため生産力は

減退したと言う人もあります。しかし私はいずれも当っておらないと思うのです。

一般的にいいまして、その場所で、その歴史的な条件下で、どうしても生きてゆくためには、こうしなくてはならないという生産組織なり形態があると思うのです。こういうところから特異性が生じてくるのです。共通性が主となっているところに、この特異性が加わって特徴を表わすということになる。大体その程度の問題だと思えます。だから、日本との違いとしては、土地の所有がどこに属するか、利益配分をどうするかという所にある程度の相違が出てくる。したがって中国が人民公社をやったから、日本にもそういうものを持つて来てやれば、生産がたちまちたかまるというような事は全然ないと思うのです。それでは、その人民公社というものはどういうところから出て来たか、この事を考えてみる必要があると思います。人民公社の生いたち 人民公社はほとんど全国に行きわたってしまいましたけれど、初めは互助組というものからはじまり、これが合作社になったのです。しかし全国一斉に互助組になり、それから初級合作社、つぎに高級合作社になったというような画一的なものではありません。日本と戦争している間にも延安付近にはすでに合作社が出現していたんです。だから一九四九年に中華人民共和国というものが出来て土地改革などやりましたが、その時すでに合作社は存在しておったのです。もちろん全然なかった所もあったわけです。しかし、しだいに初級合作社がふえ、それがある段階に来ますと、かなり急スピードに普及して行つたのです。あんまり速かつたので、これは強制でやつたのではないか、あるいは帳簿の上で作つたものではないかと、初めはそういうふうに疑がわれていたようです。と



ところがそれがなかなか基礎を持っており、けつきよく足を大地に下した人民公社にまで発展してしまつたのです。これが現在の生産組織形態になつてきております。これを單純に失敗だ成功だと評価は出来ない氣がするんです。やはりああいう条件下においては、このようにするより他に、二億以上の貧農が飯を食つて行く道がなかつたと思うのです。これが実情であると思います。

中国のスケールと判断の規準 往々にして中国を観察する場合、その大きさについで的感覺が抜けてしまうので、日本と同じような規模、水準を規準にして、向うの現象を判断、理解しようとするから、ずい分不思議なことになってくるのです。ある学者の人民公社を見てきた報告会では、人民公社を全国について見て廻つたが、全部ちがう、統一がとれていない、だから失敗であると結論しておられました。私はそうじゃなくて、全国統一がとれていないから成功するだろうと思いました。何故かと申しますと中国は九五九万  $\text{Km}^2$  あります。西ヨーロッパの大体三倍か四倍くらいある筈です。だから全ヨーロッパ二つくらいあるというのが中国の状態です。人口で言いますとも大体七億とか八億とか言っております。小さなヨーロッパ的な国家、人口が一千万とか、大きくても三千万といった国の在り方と比較して、画一的な全国統一だとかなんだとかいう問題を取りあげるわけにゆかぬと思うのです。ヨーロッパの何十カ国を一斉に統一したり、同じ条件をあてはめるなどということは考えられもしないと思うのです。中国でも地方がいくつかの省に分かれており、この省自身が歴史的に長い伝統をもつた行政区分になっており、氣質とか言語、風俗習慣には違いがあります。たとえば四川省などは、人口は一億ぐらいで、面積は五九万  $\text{Km}^2$  です。つまり日本の一倍半く

くらい面積で、人口は同じくらいです。人口についていえば山東省などは、五六〇〇万くらいで、イギリスに近く、河北省が四五〇〇万、河南省が四七〇〇万、少し前の統計ですが、江蘇省が四九〇〇万というわけで、フランスよりも人口の多い省がごろごろしているわけです。人口一千万前後の小さい省は二十三ぐらいあり、その他に少数民族自治区というのがあります。少数民族自治区というのは総面積で言いますと、日本の十六倍くらいにあたります。少数民族自治区というと、なんだかアイヌ部落みたいなのがいくつかあるように受けとられるけれど、とんでもないことです。大体大きな概念がずい分違ってくるのです。

もう一つ例をあげますと印度との国境問題ですが、あそこには領土の境界線はないのです。マクマホン協定なんていうのがあります。だが、これは地図の上にちよつと線を引いてみただけで、実際にはどこがどうであるか分からないのです。日本的な感覚で申しますと、その辺の道路かなんか隔てて国境線があつて、お互いに争っているみたいですけど、その境界線の所だけ合わせますと、ベルギーの七倍半ぐらいあるのです。だから大分大きな単位が違う。ですから中国問題は大きさを頭において考えねばなりません。

気候風土の多様性 私が日本に帰って来たころ、ある学者がやって来て「先生中国は寒いですか」と聞きますので、大変寒いし、丁度いいし、大変暑いと、こう答えた事があるのです。というのは私自身撫順の監獄にりましたが、ここは零下26度ぐらいから零下31度ぐらいになるのです。それで釈放されて帰って来る時、綿入れを着てそこを出発したのですが、上海から浙江省、いわゆる江南の地へ来ますともう緑の真盛りなんです。それからつぎに広東へ移ります



と、夏の気候で、バナナやパイナップルが実っていて、とても暑い。ほとんど同時に熱帯と温帯と寒帯が一しょにあるような所なんです。

だから中国は大変土地が広くていいですなあとという人がいる。またよく言われる言葉ですが、一望千里の平野に赤い夕日が沈んで、大変あすこは幸福ですな、日本のように小さい所でこせこせしていいはいかんですなあと、こういうふうな感じを持たれる人があります。満州の平原も広いが、河北平原もかなり広いです。しかし全体から申しますと中国の平野の比率というのは非常に少ないのです。

大体山地が多いので耕作地の絶対面積は大きいですが、人口比率で見ますと大変少ないということになります。江蘇省なんかは人口が四九〇〇万人、つまりフランスより多く、人口密度は世界一といわれるオランダの三一六人より多いのです。こういうふうな実際はかなりの変化があるのでして、高い山岳高原地帯のコンロンやチベットから、大きな砂漠地帯、またひじょうな多雨地帯まで、全部ふくんでいるのです。だから南の方で田植えている時には、北の方はもう取り入れの終った状態です。ですから耕作方法にしても耕作の時期についても、その収穫量についても、土地の状態によって、いろいろと違って参ります。大きな国ですから各地方の特異性というものを含めたり持っているわけですからヨーロッパの何十カ国を集めたようなものだというふうに考えてゆけば、中国問題は少し分かってくるのでないかと思えます。私はそう考えております。

土地所有と集団化のはじまり 次の問題は集団化が始まったという点にあります。人民公社というものの生産組織形態を理解するためには、そこから考えて行く必要があります。これには中国が農村の貧農から出発したという点から考えて行かなければいけません。自作

農がおつて、かなり豊かに暮らしていたのを集団化して行つたと考  
えたら間違いです。たとえば日本は農地改革以降自作農が出来て、  
機械が入り、テレビが入り、自動車まであつて、農業外収入で生活  
のほとんどが支えられている、兼業農家の状態が多い。統計上は農  
民という独立した生産者であり、かなり豊かに暮らしているわけ  
です。そういう農民を社会主義の下に集団化するから、ここへ集れと  
いうふうにやつたとすれば、表面上は集団化ができて、実質的に  
は集団化にそむいて、自作の原則をつらぬこうとするから、必ず崩  
壊を来してゆく。だからそうした観点から見ると、中国も同じよう  
になっているのではないかという疑問を持つことになる。しかし中  
国のばあいこれと違って、全たく自作農の経験がないわけです。

中国政府は、一九四九年のスタート以後、地主の土地を無償没収  
し、農民に分配しました。なんとなればそれらの土地は労働行為に  
よつて獲得したものでないからというのです。日本では農民に分け  
たということには自作農もふくまれており、没収した土地は地主に  
も生活の立つ程度を与えた。それから富農の土地も全部取つたわけ  
ではありません。だから富農の経済的優位性というのはあまり失わ  
れなかつた。中国ではこれも先ほど言いましたように、画一的に全  
部取つたのではなく、大体において地主の土地を取り上げて、それ  
を貧農と小農に分け与えたということです。なんとなれば貧農とい  
うのは土地はほとんど持たない。それから小農というのは全然持た  
ないわけです。いわゆる雇われ小作です。これらに分けたんです。  
だから今までの中農とか富農には土地は与えていないんです。

集団化の背景です。すなわち地主の土地を取り上げて個々に渡したもの  
ですから、全国的に全部自作農になつてしまつたわけです。この貧



農と小農も自作農になったから、もう我々も豊かな暮らしが出来るんだと涙を流して喜んだわけです。ところがどっこいそういうかないわけです。いざ飯を食うという事になるとぜんぜん食えない。なぜなら日本では地面が高いから、土地を分けてもらつたというの大変財産が増えたように感じますけれど、中国のばあい土地を分けてもらつたと言っても、今まで地主が持つていて、小作が耕しておつた土地をお前の土地だと札を立ててくれただけのことです。これが中国の土地改革です。だから貧農自身にとって実際の労働と生活は今までと違いがないわけです。ちがつて来るのは何かというと、秋になつて収穫をした場合、今までは収穫量の六割から七割くらいは、地主に小作料として取り上げられておつたが、今度は農業税というのは一〇%か二〇%納めればいいという事になったわけです。

それではどうしたら生きてゆけるかというと、秋の収穫をあげなければならぬ。そのためには鋤を入れて耕さなくてはならない。そして種子まきをせねばならない。それには家畜が要る、その家畜は地主の持つていた奴をやつぱり取り上げて分配した。今まで地主の家畜というのは、その地主の土地を耕す時にのみ使われていた。土地分配の後は一人に一頭づつ、一つ一つ行きわたることが出来ない。つまり四家族で牛一頭所有するとか、あるいは二家族で馬一頭所有するとかというふうになつてくる。また私は鋤をもらいました。こつちは鎌をもらいました。あつちには鎌をもらいました。私はなんにももらいませんと大体そういう関係になつてくるわけです。だからここで鋤を入れて畑を耕して種子まきをしようとしたら、どうしても何家族かが集まらないと手が付かないわけです。あるいは国民党が来て徴発してしまつたとか殺してしまつたので、牛も何も残つ

ていなかったという所もあるのです。そこでは牛馬の代わりにどうしても人間がすきを引かなくてはならないという事にもなります。

**合作社**　そこで三戸とか五戸とかが集まって、最初に出来たのが合作社というものです。これならなんとか耕作が出来るわけです。それで秋の収穫の結果は、自作でやっておった所より、一人あたりの分け前が多かったんです。これは多いはずで、今までは女房とか女の子は畑に出なかつたんです。南の方はかなり婦人労働者は使われておりましたけれど、揚子江から北、とくに黄河以北の方は家庭の婦人などは畑に出る習慣がなかつたんです。しかししかたがないから畑に出て、とにかく秋の収穫をあげなければならんというので必死で働いたんです。つまり投下された労働力はひじょうに多くなつたので、かなり綿密な管理が出来た。したがって、収穫は前よりも少しいゝという事になります。それを見て他の連中もこれは集まつた方が利益のようだというわけでだんだん増えて、二年目、三年目になりますと、五戸か三戸くらいで出発したのが二〇戸になり、三〇戸になりして大きくなった。だいたひ貧農層や小農層で作られたわけです。三〇戸とか四〇戸とかいう一つの自然村落体の中の貧農、小農がこういうふうに共同した仕事をやるようになって、それが少しづつふえていった。この時期には中農はまだ入っておりません。中農以上は自作農ですから、割合に豊かに食っている農民です。中農はちゃんと自分で食えて子供も学校に出せる。しかし貧農、小農は子供を学校に出すだけの経済力がなかつたのです。

**集団化以前の貧農の生活**　そのころの生活程度はものすごく低くて、ちよつと皆さん想像がつかないかもしれません。そのころお出でになつた方はご承知かもしれません、われわれの想像を絶すると言



いますか、泥でこねた煉瓦で家を作り、藁ぶきでその上に泥を塗つてある本当の小屋ですね。家具なんていうものは一つもない。茶碗が二つ三つ置いてある。それでこっちに水がめがあるくらいで、なんにもない。これが貧農の生活状態だったのです。着物はどうかというとなんて着たきり雀だった。ひどいのになると三十年間一着で過したなんていうのがあり、今、博物館で陳列されています。

食べる物はどうかというと、本当に雑穀類の雑炊みたいなものです。普通貧農の食べる物と言ったら、木の葉とか雑草とかその辺の野草を取って来てそれに粟なりとうもろこしをたきこんで、一しよに煮たような雑炊を一日に二度くらいすゝれば、まあいい方だったんです。私は戦後、捕虜収容所に収容されていた時、ユージという村に行つて泊る機会があった。その家の食事を見ると、粟めしになにかおかずを添えているのです。見るとそれはニレの花をちよつと塩漬けにしたものです。風流のようですが、ちよつと苦くて、そんなにたくさんは食べませんよ。それをおかずに粟めしを食っているのです。私たちには野菜を煮てくれました。主食は粟めしです。それでずい分ひどいなあと言つたところ、その主人が冗談じゃないと言うのです。昨年まではこんなカンファンは食べなかったと言います。カンファンとは乾いた飯（乾飯）と書くんです。これは私どもが食べている炊いたご飯の事です。今年からやつと乾飯が毎食食えるようになったと言います。これは決して特異性ではなくて貧農間の普遍性で、こういうところから出発しているんです。初級合作社の形成と旧地主の抵抗　だから自作をしてかなり豊かに食つていた農民が集まつて集団化したという問題と大分違うわけです。さきに申したように生産条件が集団化されないと、食えないと

いうことで、集団化の方向にまとまって来て、だんだん大きくなり、三〇戸、四〇戸と、自然村落の貧農層が皆入ってくる。このような初級合作社の時代は土地、家畜その他の大型の生産手段も私有なんです。しかし労働は集団です。分配は労働に応じてする。ところによつては各戸に平均に分配をしたところもあります。しかし初めての経験ですから、平均分配すると、家族の多い者と少ない者、労働力の多少や軽、重、などに差があるので、文句が出て、平均分配がだんだん変えられていったわけです。それで労働点数制というのを発明して、どういう点数の労働をどれだけやったと記録して、年末にこれを計算し、それによつて主として食糧を分配するというふうになつて来ました。分配を受けた食糧が個人でやっている者よりも少し多かつたところだけがうまく行つて、だんだん加入者がふえたんです。この時にはまだ土地、生産手段は私有なんです。これがだんだん発展して中農が入りだしたんです。ある本を見ましたら合作社が出来て農民の反抗にあつたと書いてありましたが、これは農民という概念を単純にもつてくるからそうなるんです。農民の中の中農や富農が反対をしたんです。いろんな形で反対しております。初めの頃は地主とか富農は暴動を起こしたり、武装暴動を計画したりした。これが一応おさえられると、今度はいろんな形の反抗を始めています。サボタージュもその一つです。こういう事がありました。ある地主出身者が鶏の管理をまかされたところ、無精卵ばかり作っているんです。ですからふ化場へ持つて行つてふ化させると、みんな腐つて、かえらないんです。よく調べてみると、その地主は、一種の暗黙の闘争と言いますか、隠微の闘争と言うか、にわとり雄を隠して、卵をみな無精卵にしてしまったのです。このよ



うな生産破壊的な反抗もありました。反対したのは中農から上、とくに富農地主だったのです。しかし貧農、小農は、それ以外に食う道がないものですから、必死になって守ったわけです。

貧農路線 この貧農が作ったのが合作社であり、人民公社であり、この路線を毛沢東がいわゆる貧農路線などと言っています。抽象的な言葉で言うとは難しく聞こえますが、実際の具体的な内容を言ってみただけです。さて中農がだんだん入り出した。と言いましたが、それは中農の収入よりも、合作社の社員の方が少し良いという現象が出た場合です。しかし入って一年たち、秋の収穫の分配をうけたら、中農として一人でやっていた時よりも少ないとなると、その中農はこれはいやだから出て行くと言い出す。これは人情ですわね。合作社が成功した所以はどこにあるかというと、出て行くと言った時、どうぞどうぞという事で、決して「お前出て行つてはいかん」とは言わなかった。一人でやりたいなら一人でやりなさい、われわれも出来るだけの援助をするという態度に出たんです。もちろん合作社の社員の中には腹を立てて、「あの野郎は裏切り者だ」と騒ぎ出す者もいたけど、大体そういう態度に出たんです。中農は出ていって自分でやってみると色々問題が起こってくる。たとえば水利。水がこない、それで合作社の連中に助けてもらう。あるいは日照りや、水害がある、そうした場合に独りでやっていると、どうしても手の施しようがなくて、合作社に助けてもらうことになる。そうすると、すまなかつたもう一度入れてくれるとなる。すると合作社はどうぞお入りなさいと、入れてくれる。ある所で、合作社というのは強制でやったのではないかという質問を受けました。たしかに強制はあった。どういう強制かというと、決して強制をしてはいけな

いという強制があつたんだと答えたんです。こうした事が成功の根本原因だと思えます。人間というのは強制で利益をじゅうりんしても、表面は服従しますが内面では反抗して来ますから、決してうまく行かないですね。ことに分散した農民に対し強制で事を運んでも、決して実体は生れない。しかしなんとか実体がかたまってきたのは、そういうふうな原則が貫かれたからだと思うのです。一人一人貧農なり中農に聞いてみますと、その本心を言います。それは人間の心ですね。人間の心を中心にして問題を考えないと、實際生活なり社会の動きというものは分からないと思います。私は觀察の根本点をそこに置きたいと思えます。

集団の力と合作社の成長　それでこの合作社がだんだん発展して来ますと、さらに問題が起こってくる。あすこの川からこちらへ水を引くという問題、またこの川は何時も氾濫して水害をおこすから、ここへ堤防を作ろうという問題、こういう事は村に永く住んでいる彼等の夢として、いつも存在していたんです。しかし単独に耕作をやっている時には、そういうことに手はつけられない。ところが三〇戸、六〇戸とまとまってくると、労働力としても六〇人から百人となるわけで、此の夢を実現する可能性が出てきます。それで一部の労働力をぬき出して堤防を作ったり、水路を作ったり、そうした事がだんだん積み重なってくる。その利益を受けるといふ事になると、入らなかった中農もまた入って来るといふことになる。まあ発展のサーキュレーションが行なわれて行くわけです。それでだんだん大きくなって二百戸から三百戸という一つの村落が、自然村の集まったようなものがみな入って来るといふ事になったんです。この時はまだ富農は入れておりません。富農は単独でやっている。地



主も単独でやっている。そこで今度はもう少し生産を高めて、暮らしを豊かにしようという目標が出てくる。そうすると、此処に作ったダムよりもっと大きなダムを作り、もっと大きな水路も作りたい。それから適地適作もやろうという事になって来る。そうなると土地が私有になつてゐる境界に畔があるのは不便になつて来る。畔を合わせただけでもかなりな土地が浮いてくる。そこでこの土地の境界線を取りはずす、つまり土地というものは共有にしようじゃないかという主張が出て来て、高級合作社というものになつたんです。それまでは私有ですから合作社に対して出資という形になる。土地とか家畜とかいうのは出資で、その出資分に対する配当金を受け取つたんです。それで収入は個人の労働に対する配当と、出資金に対する配当に分れてゐた。ところが配当の算定の仕方が、合作社の長が富農出身であつたり、ごまかして入つてゐる中農出身であつたりすると、自分の家族にだけ都合のいいような配当をやるわけです。この人たちはたいいてい学校などを出て知識があるものですから、会議の時にうまく事を運んで、配当金の比率を土地に対する配当の方が労働に対する配当よりも少し良くしても、彼らには大變得になる人です。というのはたくさん土地を出資していますから。こういう事例が方々で発見されて、やはり土地を私有にしておくと弊害があるから共有にしなければというので共有になった。そしてだんだん生産力が高まつて来たわけです。だから労働収入が大きくなつて来るわけです。そして、けつきよく高級合作社にかわつていったのです。

高級合作社とその躍進　高級合作社と初級合作社の違いは、前者は土地とか大型の家畜とかが共有になつた事です。共有という事は国

有ではありません。合作社所有なんです。あるいは生産大隊所有、生産大隊というのは合作社の中で幾つかの自然村なり村落なりを分けて作っているものです。これの所有か、又は合作社全体の所有か、いろいろ具体的には違って参ります。集団所有という事になりますと、土地の出資なり家畜の出資に対し、配当金はこない。配当金は労働収入だけになって参ります。これが高級合作社です。それで人民公社ですけど、これは合作社が二、三百個集まってしまうのが普通だったんです。そのうちにますます大型水利が必要になって来る。もう少し大きなダムを作ろう。もっと大きな水害防止の処置をやる。水路を作ろう、色々の計画が出てくる。それからもっと多角的に果樹園をやるうとか、工芸作物も作ろうとかとなって来るわけです。そのうちに農村で工業が必要になってくる。これはいわゆる大躍進という名前で言われていますけれど、工業を中心にした時代があったんです。一九五一年くらいから戦後の回復期に入って、ソ連からも三八六ぐらいの工場を買って、工業を拡大して来ました。中国はほとんど戦争までは、九〇％は農業で一〇％ぐらいしか工業はなかった。それも海岸線だけに集中しておった。青島とか上海とか天津とかいうような海岸線に工業が集中しておった。ですから工業品はとにかく都会からしか来ない。ところが中国というのは、先ほど申しましたように大きな所ですから、青島とか上海から運んでくる輸送距離だけでも大変なんです。雨が降ると道路は泥濘になるし、馬車で運ぶと輸送価格がひじょうに高くなる。それで工業を方々に作らなければいけないというので、内陸にもだんだん工業を作っていました。

自給化と土法の普及 たたとえば河南省が主に産出していた棉花を青



島の紡績工場で布にし、それを河南省の奥地まで持って行くわけです。これは大変な距離なんです。日本の端から端まで運ぶような話になります。ですから西安などに紡績工場を作り、河南なり山西の棉花をそこで布にして、その地方の需要を賄うというふうになっていったんです。これがだんだん地方的にとり入れられ、農村自体でいろいろな工業がおこされた。たとえばトラクターとか鋤や鍬などをどうやって作るかという問題ですが、安山の製鉄所で作った鉄を、都会の工場へ持って来て製品にし、地方へ運んで行くとなると、とてもあの広い所では、容易なことではない。だから地方で作るんじゃないかという事で、農村自体でトッチンカンで、色々作り始めたわけです。大躍進の中であの小型製鉄所、つまり土法といわれるもの大普及運動をやったんです。そこで各省全部、いたる所で小さな溶鉱炉を作り、製鉄をやり出した。この土法を失敗だと評価する人もありますが、なるほど大きな製鉄工業にはならなかったという意味においては失敗かもしれません。しかし農村が自分で鉄を作る力を持った事、そして工業なんていうのは全然考えもしなかった人達の眼を、工業方面に向けたという点で、大きな力になったわけです。それで鉄が出来るようになると機械を作ろうということになり、鋤、鍬はじめ色々作った。トラクターなんかの修理もしようというので部品も作り出す。旋盤も作ろう。小さな流れを堰止めて、小さな発電所を作り、自分の村だけは電燈つけようという話になる。中央の計画にしたがって配分を受けるには、十年から百年先になっってしまうからおれたちでやろうという事で、モーターの工場まで作ったりしていました。こういうふうに小さな工業が発達して行っただけです。

肥料もそうなんです。肥料は日本からかなり買うけれど、農村で肥効性の高いものを作ろうという事になって、小さな肥料工場が到る所に出来ました。大体中国の肥料は堆肥に頼っていたんですが、化学肥料の良さを少しづつ認識してくると、自分で作ろうというわけです。それから調味料とか漬け物だとかの生活物資も、水利などに必要な煉瓦も作ろうというので、そういう工業が出来てくるわけです。だから在来の農民という概念と大分違ってくるわけです。

そういうものを全部統合して運営するということで人民公社という形になって来ました。

人民公社への途　　こういうふうにまとまって来ますと、二、三千戸の単位になって来ますから、かなりの人口と労働力と資金力を持つようになつて来ます。そしてかなり大型の水利も、工場の経営も出来るようになってくる。それだけの力を持つてくるから、学校管理や治安警備も任せようという事になってくる。もともと警備を任せたという事は、警察が引き揚げて民兵にやらせたみたいに感じられかもしれないが、そうではないんです。元来中国の農村には警察は駐屯していませんでした。中国の農村は日本のように泥棒がいたり、強盗殺人があつたりしない。昔あつたというのは地主が居たからあつたんです。つまり取る物があつたわけ。盗賊では地主の息子や娘を人質に連れて行つて金品を強奪するドシと言うのがあつた。地主がいなくなつて、金とる相手がいなくなつたので、そういう泥棒というものはなくなつたのです。中国に泥棒がいらないと言いますと、なんだかみんな孔子が孟子みたいになつたように思われやすいが、そうした事情があつたのです。この頃は高分子もふえましたので取ろうと思えば取る物はあるんですが、人民銀行の預金通



帳なんていうのは取ったところで直ぐ分かってしまいうから使い物に  
ならない。また日本人が観光団か訪問団で行って、八達嶺へ行く途  
中、下げていたカメラが重いので、どこかへ預けたいと言ったら「  
ああこの木に架けとけよ、木に架けておいて帰りに持って行けばよ  
いじゃないか」と中国の人が言う。「こんな所へ架けておいたら、  
人にとられはしないか」「いや大丈夫、誰れも持っていきやしない  
よ」というわけで、その木に架けて見物して帰って来たら、やはり  
ちゃんと架かつていたそうです。写真機などは珍らしいから、そん  
な物を取ったら直ぐ分かってしまいます。とに角そういう状態です  
から、農村の警備とか治安とか言っても夫婦げんかの仲裁ぐらいな  
んです。治安という事で一番力を入れるのは、旧地主の反乱という  
事です。先ほど言ったようなサボタージュしたり、放火して倉庫を  
焼いたりしたので、そういう者を取り締るために民兵が居たんです。  
民兵というのは普通の貧農です。中農なんかは民兵にならない。民  
兵は家に鉄砲をかけてある。何かあると鉄砲を持って行って取り押  
えようと、これが農村の治安なんです。こういう事も人民公社に任  
せようという事になった。また学校については、以前は文部省のよ  
うな所でやっていたけれど、通うのに半日かかるような所へつくら  
れると教育が出来ないわけです。通える所へ造ろうとすると予算が  
ない。それではわし等で造りましょうと、人民公社で造り管理する  
事になる。こんなふうにして現在の人民公社が出来たわけです。人  
民公社という名前ですが、毛沢東なんかが人民公社を作れと言った  
のでつくったという説がありますが、実はそうではなく、そういう  
生産形態が全国的にかなり作られていたんです。

人民公社の発展と不平分子の出現 それは高級合作社の大型化とい

う現象をとりながら普及し、全国で大体四〇%ぐらいそうになって来つたんです。そしてその傾向はますます発展するであろうというのが当時の見込みであつた。そして色々な名前をつけておりました。人民公社あるいは共産主義農場など。中国は文字の国ですからいろんな名前をつけていたのです。毛沢東さんが視察をした時、河南省のある部落に人民公社という名前をつけていたところ、この名前はいいなあ、人民公社ハオーというわけで、人民公社と名前を変えようと、これが全国に普及したんです。高級合作社が結合して二、三千単位のものになって人民公社になったんです。しかしあまり大き過ぎると不便のようです。満洲のある所で作られた太陽という名前の人民公社は、一万三千戸ですか、人口で言うと三、四万の人民公社が出来たんです。あまり大き過ぎて管理が非常に困難で、また管理する指導者にもそこまでやり切れる人物が居なかったというわけで、小さくするという話です。具体的に現実に即した事をやっていたように思います。人民公社の連中も不満を持つんです。もっと発展さし、もっと豊かになろうというのです。現在はまだ低いですから、そういう不満を持つ。しかし人民公社という集団労働的なものはいやだから、それをぶち壊して個人主義の方に持つてゆかうという不満は、中農とか富農とか地主の方にあつた。これは劉少錡の路線とつながっていて、劉少錡の勢力のもとにあつたんです。劉少錡の部下というのは大体、インテリゲンチヤで、都会地におつた人たちです。劉少錡という人は戦争中ずっと敵後方地区と言いますか、日本軍とか国民党が占領しておつた地区の地下工作を指導しておりました。その部下は大体大学出のインテリゲンチヤでした。趣味や生活内容においても地主や富農と共通性がある。芝居を見る



にも、小説読むにしても共通性があつた。食事にしてもこの人達は肉と卵とおつゆというふうに二つか三つの皿を並べ、小麦粉で作つた万頭とか、うどん、あのミエンですね、そういうものを主食にして食っている。そして私たちに話かけるにも、もうなんにもありませんのでと、言うわけです。貧農になりますと、とんでもないんです。そんな物は一年に一回食えるか食えないかという状態なんです。こういうように趣味や生活が合いますから、非常に仲良くなつて一つの派閥になつたんです。それが今度の文化大革命でワイワイ言われて倒されたんです。倒されたと言っても殺されたわけではないですから、その連中はそのまま残つて仕事をしています。しかしそういうふうな感覚や判断基準で仕事をしてもらつては困るといふので、いろいろ教育をやつた。教育といつても、ただ学校へ集まつて講義を聞くというのでなくて、「実際お前働いてみる」「それで貧農自身がどういふ生活をしてとるか、一しよに生活したら一番よく分かる」と、まあこういう教育なんです。今でもそういう感覚が残っている。劉少錡の部下たちは都会で会議などやりますと、ホテルへ泊るわけです。日本のホテルとあまり違いのないくらいいいホテルをたくさん造つていた。ところが毛沢東の部下、毛沢東系統の者は全部貧農出身ですから、会議に行くというと、手拭にとりもろこしの団子などを包んで持つて行き、お湯をもらつてかじっている。夜ホテルへ泊るなんて言つたら、それは金がかかる。そういう金は自分の合作社や人民公社から出させるのは勿体ないというわけで、馬小屋なら藁があるだろうと、馬小屋をさがしてその藁を取り出して寝たとか、そういうように生活感情の違いがあるわけです。中農、富農、地主層とくに上層中農から上の方の連中は、劉少錡を動かし

て、なんとか元のようになりたい、自作農にしたいと考えるんです。地主、富農、上農、中農は自作農に帰りますと、生活が高まり昔のようないい生活ができる。ところが農村人口の六割くらいを占める貧農や小農層は、そういうふうな生活をした事がない。これは夢の中でだけ存在したんです。地主がおらんようになって自作になったら、ずい分豊かになるであろうと夢の中だけで考えていたんです。だから日本のように自作で豊かに暮らして来た経験を持った人の感覚と感情とはずい分ちがっています。単純に日本的に考え、農民というものは土地所有本能があるから、集団化されると生産意欲は減退するであろうという日本的な観察とは大分違ってくるわけです。生産意欲そのものは、大変高い者と低い者といろいろありますので、十ば一からげに集団化すると生産意欲が高くなるとか、いや自作にすれば高くなるとか、そういう議論は成り立たないと思うのです。集団化して生産意欲の高まった者と、怠けて、人がするから俺はそんなに働かんでも、もらう物だけもらえばいいよと、こういう人達との間にいろんな葛藤が繰り返されながら、なんとか今日まで来たわけです。

中国農業のとらえ方 人民公社のことをだいぶん長く申し上げましたが、大体以上のようになつて来ると思っています。これが日本の農業の生産組織とずい分ちがつた特異点であり、相違点じゃないかと考えます。それから基礎地盤として非常に大きな面積の中で行なわれている。すなわち寒帯と温帯と熱帯とを全部含んだような気候条件の差をもち、非常な高原地帯から、砂漠地帯、草原地帯、平野地帯、山岳地帯、又多雨地帯、乾燥地帯と、これらを全部ふくんだ広大な所に行なわれている農業であるということ、それからその根本には



われわれと同じような人間が働いており、人間の感情を持って事に当たっているということ、これら三つの事を合わせ考えてみると、大体中国の農業の概念が得られるんでないかと思ひます。

いろんな数字を見られても、それがうそか本当か、どういふ事を表わしているのかという問題が出てくると思うのです。すべて書を読みすべてこれを信ずれば、書なきに如かず、という古い言葉がありますが、ニュースを見、データを見て、それをすべて信ずるのなら、我々の頭がテープレコーダーになつたのと同じです。そうではなくて端つこの尖りを見れば、端つこでない平らな部分も見るといふ観察方法を適用して、今の各種の条件を考慮して問題を見れば、中国の実際の状況というのがかなり正確に観察出来ます。それから今後中国がどういふふうに発展し、中国の農業がどのように発展し、アジアなり、日本に対し、どういふ影響を及ぼすだろうかということを予測するのも、そういう基礎から見て行きますと正確に把握出来るのではないかと思ひます。中国の農産物がドット日本に入つて来たら日本の農業がつぶれてしまうという議論もありますが、やはり人間ですから交渉によつてどうにでもなる。そういうようにさせてしまえばそうなるという事でして、そうさせなければそうならない。それにはどうしたら良いか、どういふ処置をとれば良いかという具体的処置を考えて行くべきだと思ひます。抽象的に向うの農産物が入つて来たら全滅するんだと、ワァワァ言つて単純に反対だと思つて行く必要はないと思ひます。まだ生産力の問題とか、農業の機械化の問題とかいろいろあるようですけれど、時間が参りましたので、ここで私の話を一応ストップさせていただきます、あとは時間のあの限り、皆様のご質問なり、ご意見なりをうけたまわつて、問題の

本質を明らかにして行つたらどうかと思います。

## 質疑応答

中田 それでは、今から質疑応答に入りたいと思います。

問 合作社全体として、あるいは人民公社全体として、こういう作物に中心を置いて行こうとか、そういう点について。

城野 これは合作社が初級合作社の時代と高級合作社の時代で違ってきます。大体三つの要素があります。それは政策として、米をどれくらい作らねばならないという事があります。八億の人間が食っていくのですから大変ですよ。大体食糧生産というのが主任務になって来る。金になるからと言って、野菜とか工芸作物ばかり作ってもらっちゃ困るという要求も出ますから、それに沿った線の一つとる。それからもう一つは合作社なり人民公社が、みんなに対して利益があるようにというのが考慮点の一つです。工芸作物を作った方が利益になるので、よく議論をやったようです。ある人は「国家の方針だから、それにならえ、そこへとうもろこしを作れ」と。ところがこっちの方は「棉とか、こんな野菜を作った方が収入が多いから、これを作ろうじゃないか」というふうになって大分議論するわけです。それをどっちが人民全体の利益であるかという事で決定しているわけです。第三の点は、初級合作社の場合は私有地に対する所有者の意見なんです。「おれの所、ズーッと小麦作つとるんじゃないから、他の物作つてもらつては困る」とか、いろいろ意見があったようです。そういうものを調節しながら村の会議で決定しておったようです。それで国家の方針は貫くが、個人の利益も尊重するという方針です。たとえば何かの調節点を求めるといふ時は、右なら右の端の



意見だけでガースト相手を抑えつけて行くと、後で必ず発撥を生みますから、なるべくいい加減な所で妥協して調節するような方針でやっていたようです。そういうところに中国の人間の在り方、問題の考え方がひじょうに良く出ているような気がします。

問 人民公社になった今でも、まだ初級合作社と高級合作社は同時にあるわけですか。

城野 いや、それはありません。

問 そうすると人民公社の中に小さなグループがあるわけですか。

城野 それはあります。生産大隊から生産隊とあるんです。土地の所有形態なんかもまちまちです。生産隊の所有であつたり、生産大隊所有であつたり、あるいは人民公社の所有であつたり、所によってそれぞれ違うようです。ある学者が訪ねて行くと、相手がみんな違うのでとまどつたという事です。こつちへ行くと土地が人民公社所有、こつちへ行くと生産大隊所有、さっぱり分からないと。しかしどれも本当だと思ひます。その区分についてはあまり嚴格に考へておらないようです。生産大隊所有の場合には、その生産大隊の計画で、この土地に何を作るか、これからあがつた収入は自分たちで分けて、他へ流さないとか、計画するわけです。人民公社所有のばあいには、そこであがつた収入は各生産大隊に分けられる。生産隊であがつた収入は生産隊の構成人員に分けられる。ですから各生産隊なり、生産大隊によつて収入に差が出てくる事になります。

問 生産物の価格はどこが、どういうふうに決めるんですか。

城野 価格は市場で決まるわけですけど、この点ひじょうに面白いので調べてみる必要があると思ひます。つまり価格がひじょうに安定しているのです。安定しているのは強制的に公定価格を作つ

ていると見たら間違いだと思うんです。公定価格を作っても安定はいたしません。必ず闇価格が出て来ます。というのは供給が足りないとなると必ず闇価格が出てくる。実際上の売買において安定した価格が維持されているというのは、いつでも需要に見合うだけの供給が行なわれているという事なんです。そうすると生産と流通、輸送その他が、かなりうまく計画的に行なわれていると言えるわけです。工業品にしてもそうなんです。それから貨幣価値が非常に安定していて、物価はだんだん人工的に下がっているんです。コストが安くなると下げる。薬などこの前大分下げました。簡単に言うと、需要に見合った供給を、かなり長くかかって準備し、何時もそうやっていけると言うことです。しかしこれをどういうふうに仕組んで、どういうふうにやっているかと言うのは未だ私にはよく分かりません。世界的奇蹟ですから、かなり問題にしてもいいと思うんです。問 東南アジアの農業開発を考える場合、中国が国際舞台に登場した段階で、日本はどういう所に着目して行けばよろしいのか、お考えをお聞きしたいと思います。

城野 われわれとして気をつけなければならない問題が、そこにあるかどうかは疑問です。第一、国際舞台に登場して来たと言うのは、客観的事実に合わないと思うのです。実際中国は国際舞台にはかなり以前から登場していて、六〇何カ国とちゃんと国交をやっており、バンドル会議、ジュネーブ会議その他の国際会議でもかなり活躍しておったわけです。主要な資本主義国家とは、ほとんど国交関係や条約関係を結んでいて、交流があつたわけです。いちばん最後まで残っていたのはカナダとイタリアでした。ところが日本の新聞はカナダとイタリアが資本主義国家として、初めて国交を結んだような



印象を与える書き方をしましたが、実を言うと最後です。イギリスやフランスその他のヨーロッパ諸国は、ほとんど全部中国との国交関係を回復してしまっていた。ヨーロッパで今残っているのはスペインとポルトガルだけです。これはちょっと特殊な存在ですから、資本主義国家で残ったのは結局日本とアメリカだけになるわけです。だから国際舞台にはかなり前から登場しておつて、今度は国連の議席が回復されたと、これを加盟したとしている新聞がかなりありました。が、中国人の考え方から言うと、加盟なんていうのはとんでもない、加盟はズット昔に、日本よりズット早くやつておるといふわけです。あのアルバニア案も国連における中国の正当な議席の回復という事になっていきますね。だからそういうふうに見ますと、今から事新しく問題は起らないような気がします。ただ国連という舞台が出て来る点が相違点です。この舞台をどう見るかによつて、ある程度の違いが出て来ると言えます。しかし今までと同じだと言う点为主か、それとも相違点为主になるかと言いますと、やはり今までと同じような点が主になって来るのではないかと思います。そこにある程度の変化は考えられると思うのです。国連という舞台ですから、東南アジア諸国との、そういう意味での付き合いがズット出て来ます。タイ、マレーシア、その他、中国との国交関係を回復して行く可能性があります。そうするとあすこには、まず華僑という問題があります。マレーシアなんかは大部分が中国人であるし、タイで経済勢力を持つているのは、大部分が中国人であるという事実です。観察の主要点をそういう所に置かれるといひのではないかと思います。

問 労働の点数制度があるとおっしゃられたのですけれど、その労

働評価の問題についてお尋ねします。

城野 これも各合作社、各人民公社で、それぞれ工夫してやっており、大体に共通性はあるかもしれませんが、それぞれの特異性をいろいろ持っているんです。だいたいを申しますと、こういう仕事は一日何時間働いて何点と、たとえば土を掘るとか岩を崩すとか、危険な肉体的エネルギーを消費するような仕事は点数が多いのです。しかしその辺を掃くとか、その辺で鶏を追っているとかが言うのは、軽い労働で点数が低いわけです。それを一日何時間やったら何点という事になります。それと働き方の結果の判定を加えるわけです。お前の仕事は六〇点満点だけど、これでは四〇点しかないとか。こういう評価法が積み重ねられて、経験の中から出来たようです。これを年間集計して点数を出す。それによって分配すべき収穫物を分配する。収穫物のうち一部分は税金に納めます。農業税というのは初めは二〇%ぐらいであった。これで工業建設をやったのですが、だんだん減って来て、工業自体からの収入で工業建設が賄えるようになって、今では財政の七〇%から時には八〇%ぐらいは、工業からの上納金になります。日本で言えば法人税ですね。これで賄っていますので農業税は今五%ぐらいに下がっています。こういうものを除いて、後は合作社の共同積立金として残し、生産施設その他への資本投下にするとか、福祉施設、学校その他に使うとかし、その残りを個人分配にするわけです。この個人分配すべき部分を、点数で割って分配しているのです。

問 相当個人差はあるんでしょうか。

城野 個人差はずい分あります。よく働く者と働かない者の差。土地の出資については、土地の良さと大きさを算定しますから、いい



土地を出資した者とそうでない者との差。それからよく働く牛と働かん牛では点数の差があります。そこで収入がずい分ちがう。それから労働も、よく働く家族の多い者、労働供出の多い者は、そうでない者とずい分違つて来ます。

問 二点おたずねします。一つは中国が統計的な把握が、ひじょうに難しい状況にあると思うのです。それがどの程度なされておるかと言うこと。第二点は東南アジア等に対し、中共がいろいろ経済協力するようになると思うのですけれど、中共の経済協力の展開の仕方について、どんなお考えを持っておられるか。

城野 第一の点は中共統計局というのが出来ていて、かなり正確な数字をつかんでおるようです。発表はしませんけれど。何故正確な数字をつかんでいるかと言えば、全国の生産は人民公社でやりますから、人民公社の責任者は自分の所でどれだけの物を作つて、どれだけ出来ているかは良く分かるわけですから、割合まともに報告するでしょう。これは私の推察です。それから資料なり、統計的数字はかなり集積していると思うのです。何故発表しないかと言うと、今ソ連と戦争危機にありますし、アメリカとはズート冷戦を続けていたし、日本との間には未だ戦争状態が終結しておりません。いつ攻めて来られるか分からない。大体こういう事ですから、一種の戦時中の国家であり、彼等自身はそう考えている。だから発表しない。敵に知られては都合が悪いと思うのでしよう。それから生産計画は大まかな所は作っていると思うのです。

食糧生産はとにかく世界人口の四分の一を占める七億から八億の人間に、餓死者を出さないで、食わしていると言う事実から問題を觀察する必要がある。これは大変な事実だと思うのです。統計数字

で言うと、昔の中国の農産物は一億三千万トン〜一億四千万トンだった。今二億トンは生産されています。統計数字ですから漠然としたものですが、二億トン出るとかなり余裕があるのです。そこへ五百万トンの小麦を輸入しているから、食糧不足じゃないかという見方があったようにですけど、五百万トンという数字と小麦という品目に着目する必要があると思う。小麦というのは中国では高級食糧なんです。南方では食べない。北方なんです。北方では小麦と言うのは一年に一べん食えればいい、高級食糧品だったです。今でも高級食糧品である事に変わりはない。それと五百万トンと言う数字ですが、中国は昔から食糧の輸入国だったんです。しかも小麦中心だったのです。だから五百万トンの小麦は不足を賄うと同時に食生活の向上と言いますか、そういう内容を含んでいるわけです。それから二億トンとか二億四千万トンという膨大な食糧の数字から見ますと、五百万トンという額はそう大きくない額です。

それから第二の問題は、つまり人民公社などと言う生産組織、社会制度的なものを押しつけるような協力になって行くのかどうかと言う事ではないかと思いますが、そうしたことはやらないと思います。と言うのは今までもやっておりません。それで農業技術の援助はなるべく相手に役立つようなものをやつてやる。これが主旨になつています。実際もかなりそうやつているのです。たとえばアフリカに稲作の技術援助で技師を派遣したり、モロッコにお茶類を作つたり。モロッコはお茶からビタミンCを補給するので、かなり消費量があつて、これまではフランスの商人が中国のお茶を大量に輸入しておつたのです。ところが中国と国交が開けて来ますと、あんなの国は土地気候上条件がお茶を作るのに適合しているから、作つて



はどうだと言うので、中国から技師が苗持つて行つて植えた。それが育つて今ではモロッコでお茶がとれるようになっていきます。

それから援助の特色はどこにあるかと言うと、派遣される技師などには全部条件がついているんです。どういう条件かと言うと、受け入れ国の、同じ程度の技術を持った人の収入と同じだけの俸給という約束なんです。中国から来たから特別にやつてもらつては困ると、それから生活程度も同じにしてくれと。だから向うの生活になじめない者は行っていないのです。これは受け入れ国からも大変感謝されているようです。そういう所から見ますと、今後東南アジア諸国にそういう関係が出来ても、やはり同じ方針で行くのでないかと思います。それで平和共存、平等互恵をモットーにしていますし、相手国の内政には干渉しないと言うことですから、どういう社会制度をとろうとも、お互いに利益になる事をやるうじゃないかと、この方針で今までやつて来ており、これからもそういうふうに行つて行くのではないかと思います。

中田　それでは予定の時間が参りましたので、この辺で今日の研究会を閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。

# 海外農業ニュース(十四、二八号) 索引

## I 座談会。提言および特集

今日の提言 渋沢信一 ..... 14号

ミツゴロ特集 ..... 14号

南スマトラ、ランボンのミツゴロ農場開発について(講演)

大原 寛

ミツゴロ農場のあらまし

ミツゴロに注ぐ日本の眼

一、民間商社と政府の眼

二、財団からの訪問者の眼

三、事業担当者の眼

四、学者の眼

五、新聞記者の眼

東バキスタン特集 ..... 15号

東バキスタン農業協力研究会記録

農業近代化と農村の変容(アジ研) 桐生 稔

東バよりの引あげ一番機で帰国した専門家の話

農業使節団の十五年と農業技術訓練センターの十五年

政府ベース農業技術協力特集(Ⅱ項参照) ..... 16号

今日の提言 安西正夫 ..... 17号

企業農業特集 ..... 17号

企業農業の意義 岩田喜雄

北スマトラにおける企業農業(調査報告)

インドネシアのプランテーション概説(大戸元長)



北スマトラのプランテーションの現況（平川正直）

インドネシアの養蚕事情（久津間 伝）

プランテーションとどう取りくむか（大戸元長）

ゴム

（成瀬慎一）

オイル・パーム

（浜上吉雄）

コーヒー。カカオ。茶

（長戸 公）

タバコ

（星子 大）

スマトラ東海岸州における農業発展史（西村昌造）

## 林業特集

18号

海外森林開発推進事業の構想

左達一也

森林伐採跡地利用について（座談会）

テレビNHK・海外森林開発競争

NHK 海外班

カリマンタンの熱帯林開発現場

高須 久

インドネシア森林開発現場の医療と衛生

小林準之

空中写真から熱帯林を調べるには

中島 巖

## 農機具特集

19号

発展途上国における農業機械化

前田耕一

海外向け農機具（座談会）

発展途上国における農業機械化の諸問題

岸田義邦

アジアにおける農業機械化の経済性

柳田友輔

アジア各国の農業に見合う機械化

上条盛雄

日本の農機具の南方適応性

日野茂樹

日本の農機具の販売と普及

坂本正雄

## ランボン特集 その一

20号

ミツゴロの太田社長・大原前社長をかこんで（座談会）

ミツゴロ第三農場の開墾から現在まで 後藤隆郎

南方開発の夢を寒河江善秋氏に聞く

ランボンの土 最上 章

ランボン特集 その二 ..... 21号

ランボンの農業開発に寄せて 千葉弘見

ランボンの地形と水利 下川善之

ランボン特集 その三 ..... 22号

ランボン総合開発の考え方 大畠幸夫

タイのトウモロコシの教訓 大戸元長

アメリカのコーンベルトの教訓 中田正一

肥料特集 ..... 23号

日本の肥料輸出現況表

熱帯農業と肥料(座談会)

肥料輸出の現状と問題点 大津寛男

海外の化成肥料事情について 潮田常三

東南アジアの肥料問題への提言 平野 俊

インドにおける肥料パイロット・スキーム 今泉吉郎

熱帯地方の施肥問題 西垣 晋

農業特集 ..... 24号

世界の農業と農薬事情 石倉秀次

東南アジア諸国の農薬使用状況 村山隆成

農薬規制の方向 後藤直康

東南アジアの病虫害防除の实情 河野達郎・水上武幸

発展途上国への農薬輸出について 鳥越 毅

オイルバーム特集 ..... 25号



オイル。パーム（ベルネエグ教授原著。佐藤孝教授訳）

ランポン特集 その四 ..... 26号

ランポン農業開発基礎調査団報告会

ミツゴロ研修生の研修報告

ランポン州視察旅行報告 中田正一

（付）ジャワ、スラベシ、タイ国視察旅行報告 中田正一

オイルパーム特集 その二 ..... 27号

スマトラのオイルパーム園について 浜上吉雄

スマトラ、アジャム園の経営について 宮地勝彦

スマトラ東海岸におけるオイルパームの工場について

沼尻修一

最近のスマトラにおけるオイルパームとオイルパーム農園の開設

平川正直

最近のサバ地区のオイルパーム 植松真一

わが国における油脂事情ならびにパーム油について

今村正男

最近のオイルパームの技術革新、特に新品種の改植

西村昌造

## II 政府ベース農業協力

政府ベース農業技術協力特集 ..... 16号

フィリピン

インドネシア

マレーシア

タイ

カンボジア

ラオス

ベトナム

インド

パキスタン

セイロン

ネパール

水産における技術協力

農業協力のあり方（座談会）

16号

農協育成計画によるメイズ等開発計画（タイ国）

アジ研 野中耕一 16号

政府ベース農業技術協力特集

28号

国際間の経済協力の動き

日本の経済協力の現状

政府ベース農業技術協力の経緯

政府ベース農業技術協力の紹介

ヨーロッパ主要国における開発協力行政

農業技術協力のあり方（座談会）

### III トピックス（国別）

トーメン（東洋綿花）スラベシへ進出 14号

フィリピン新四カ年計画における砂糖需給、生産予測 14号

チークの丸太からテーブルへ 14号

新ビマス計画の概要 15号

収穫労力の不足と機械化（ビルマ） 15号

タイ国第三次五カ年計画における必要援助額 17号

韓国の農業機械化計画 19号



サバのオイル・パームについて	植松真一	19号
エステート部門における外資政策（インドネシア）	.....	19号
躍進するインドネシア森林開発	.....	19号
フィリピンの公有地問題	.....	19号
ビルマのトラクター・ステーション	.....	20号
温帯向け新品種IR 24、第五番目の品種IR 24	.....	21号
インドネシアのビマス関係ニュース	.....	21号
インドネシアの木材関係ニュース	.....	21号
バイラスに悩むフィリピンのIR系品種	尾崎 忠	22号
曲り角に立つタイの米穀政策	野中耕一	22号
フィリピンの農地改革法改正	浅野幸穂	22号
再発したフィリピンの米不足と比政府見解	浅野幸穂	23号
大農精神とは	編集係	24号
「農業は大農に学ぶ運動」	浜 勝彦	24号

#### N 資料

昭和四六年度海外協力関係各省予算	.....	14号
ランボン州のあらまし	.....	20号
インドにおける土地改革と緑の革命（ベルグマン教授）	.....	22号
ハワイ大学東西センター	.....	23号
ハワイ大学CCCCTR	.....	23号
V その他	.....	17号
海外農業セミナー開催要領	.....	17号

海外農業に対する協力事業ならびに

開発事業に従事したい方

海外農業に対する協力事業ならびに

開発事業に必要な人材を求めている方

は本財団へご連絡ください。

海外農業開発財団は左の事業を行なっています。

- 海外農業技術者となることを希望する方の登録とブール
- 新人からの海外農業技術者への養成
- 待機中における技術のブラッシュアップに必要な研修費の貸付
- 海外農業の協力および開発事業をしている団体企業等へ優秀な農業技術者のあっせん
- 海外農業調査団の編成、送出
- 海外農業情報のしゅう集、紹介

海外農業ニュース

昭和四十七年四月二十日 通巻第二十九号

編集兼発行人 石 黒 光 三

発行所

財団法人 海外農業開発財団

郵便番号 一〇七

東京都港区赤坂八ー一〇一三二

アジア会館内

電話 直通 (四〇一)一五八八

(四〇二)六一一一

印刷所 泰 西 舎



